

(8) 佐保山東 遺跡

目 次

I 遺跡の位置と環境	365
II 調査の方法と経過	365
III ま と め	367

調査要項

所 在 地：仙台市茂庭字佐保山東

遺 跡 記 号：AE（宮城県遺跡地名登載番号：01096）

調査期間：昭和47年10月17日～10月20日

調査対称面積：約1200m²

発掘面積：175.5m²

調査員：宮城県教育庁文化財保護室

白鳥良一

I 遺跡の位置と環境

佐保山東遺跡は仙台市の西南部に位置し、国鉄長町駅の西方約5kmの地点、仙台市茂庭字佐保山東に所在する。

仙台市西部を地形的にみると、奥羽山地から派生して東にのびている青葉山丘陵、高館丘陵があり、それぞれ、宮城野海岸平野、名取平野に達している。両丘陵間に名取川が西から東に流れており、流域には段丘、扇状地性低地がみられる。青葉山丘陵の東部は洪積層の堆積面を残す130～200mの台地性丘陵であり、その上に標高321mの太白山が突出している。

太白山から南東にのびる丘陵は末端部でなだらかな台地を形成しており、その台地のひとつに本遺跡が立地している。この遺跡は東北自動道建設に伴う分布調査で新たに発見されたもので台地の中央部から谷に面した北西斜面にかけての畠地に、縄文土器および平安時代の土師器の散布が認められる。

遺跡周辺の丘陵や段丘上には、本遺跡のほかいくつかの遺跡が知られている。本遺跡の北東約1.4kmには旧石器の出土地として知られる青葉山遺跡がある。縄文時代の遺跡は人来田山遺跡、人来田A、C遺跡、羽黒台遺跡、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、上ノ山遺跡などが知られている。弥生時代の遺跡としては人来田A遺跡、人来田山遺跡、西台遺跡がある。古墳時代、奈良・平安時代の遺跡としては、人来田B、C遺跡、羽黒台遺跡、西台遺跡、堀ノ内遺跡、清田原西遺跡、汚田通遺跡、北前遺跡、などがある。

II 調査の方法と経過

東北自動車道は本遺跡の立地する台地の北西斜面をかすめて通るため、遺跡が路線敷までのびている可能性もあったので調査を実施した。

調査は路線敷の幅杭を中心に幅3mのグリッドを設定して実施した。その結果、発掘区では約15～30cmの表土の下がすぐ地山となっており、遺構、遺物は全く発見されなかった。



国土地理院発行 1 / 25,000 「仙台西南部」を複製
第1回 南辺の遺跡

III まとめ

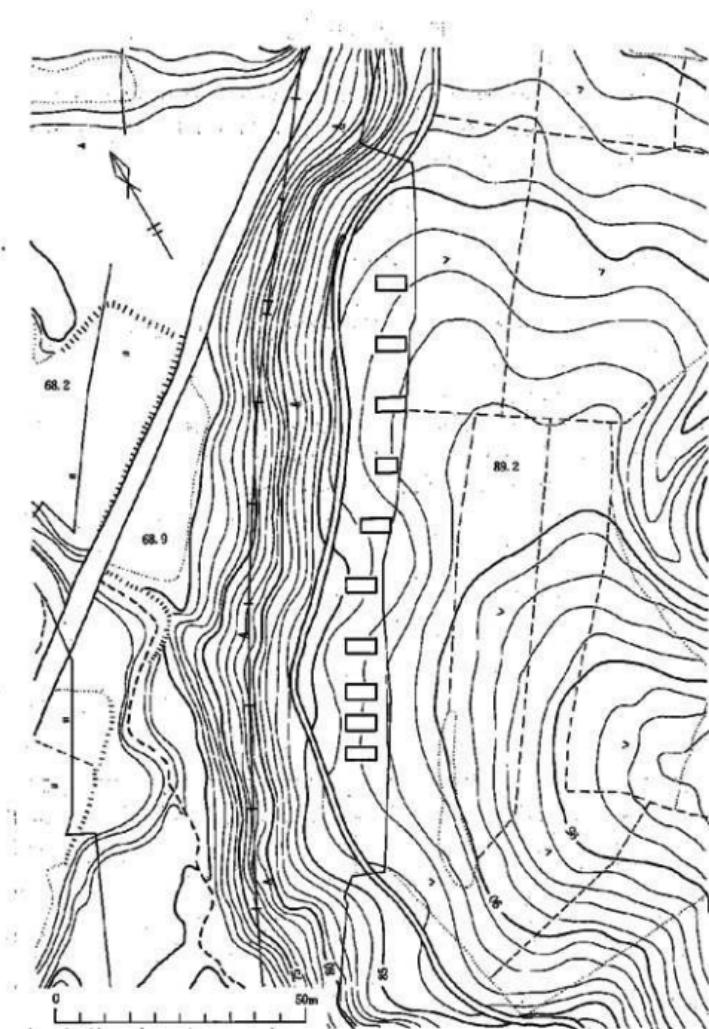
佐保山東遺跡は遺跡内の畠地に縄文土器、平安時代の土師器の散布がみられるが、今回の調査区では遺構、遺物の発見はなかった。従って遺跡は東北自動車道路線敷まではのびておらず、台地の中央部を中心とするものと考えられる。

<参考文献>

- 白鳥良一（1973）：「佐保山東遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査報告』
宮城県文化財
(白石市・仙台市～大和町地区)
調査報告書 第31集
- 白鳥良一（1974）：「佐保山東遺跡」『日本考古学年報』 24 (昭和46年度)』
- 宮城県教育委員会（1976）：『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書 第46集
- 宮城県教育委員会（1976）：『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書 第47集
- 佐藤好一（1972）：「名取川水系遺跡分布第2次、第3次調査予報」宮教考古4
- 宮城教育大学考古学研究会（1973）：「名取川水系遺跡の分布調査」宮教考古5

番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号
1	佐保山東遺跡	古墳地	縄文・平安	01095	9	西古瀬跡	古墳地	平安・古墳・平安	C1083
2	曾根山東遺跡	*	縄文 (後)	01113	10	東ノ内遺跡	*	平安・平安	C1084
3	森木遺跡	*	縄文	01024	11	西田原西遺跡	*	平安	C1169
4	人来田A遺跡	*	縄文 (中)・弥生 (中)	01072	12	西所通遺跡	*	平安	C1167
5	人来田B遺跡	*	縄文 (大字B)・弥生 (例示)	01023	14	山扇上 / 金瀬跡	*	縄文	C1103
6	人来田C遺跡	*	古墳・平安	01073	15	北瀬遺跡	*	縄文 (早・中)・古墳・平安	C1077
7	人来田D遺跡	*	縄文・古墳・平安	01074	16	上ノ山遺跡	*	縄文	C1078
8	羽原台遺跡	*	縄文・古墳・弥生・平安	01048					

遺跡地名表



第2図 トレンチ配置図

測 計 造 影



調査区の状況



調査区の状況



図版 1

(9) 権 現 森 遺 跡

目 次

I 位置と環境	373
II 調査の経過	373
III 調査の成果	376
1 出土遺物	376
2 出土遺物の年代	378
IV ま と め	379

調査要項

遺跡所在地：宮城県宮城町芋沢字権現森山

遺跡記号：AF（宮城県遺跡地名表登載番号：21028）

調査期間：昭和47年11月1日～11月11日

調査面積：約2800m²

発掘面積：約459m²

調査員：文化財保護室

白鳥良一 田中則和

I 位置と環境

権現森遺跡は、宮城県宮城郡宮城町芋沢字権現森山に所在する遺跡で、仙台市中心部から西方約6km、国鉄仙山線落合駅の北東2kmに位置している。

仙台市に西隣する宮城町の地勢は奥羽脊梁山脈とそれから派生して東伸する七北田丘陵、青葉山丘陵などの丘陵地によって大半が占められ、町中央部には七北田・青葉山両丘陵を開析して流れる広瀬川とその支流によって形成される盆地地形が東西に細長く延びている。

権現森遺跡は、宮城町の北部丘陵地帯である七北田丘陵のほぼ東端に位置しており、周辺一帯に広がる丘陵は、仙台市の北西部丘陵地帯と共に国見丘陵と呼称されている。この国見丘陵の頂点となっているのが権現森山(標高313.8m)で、権現森遺跡は、この権現森山の東側山麓そぞぐ小さな沢が南流している。

権現森遺跡の立地する小谷沢沿いには、権現森遺跡以外の遺跡は確認されてはいないが、宮城町内には広瀬川とその支流域に形成された中、低位段丘面上やそれに接する丘陵縁辺上を中心として縄文時代から近世までの多くの遺跡の立地が知られている。宮城町東部、権現森遺跡周辺の遺跡分布を示したのが第1図である。縄文時代の遺跡には、棟林遺跡・五輪塔遺跡などがあり、二本松A遺跡、棟林C遺跡でも縄文土器が出土している。弥生時代・古墳時代の遺跡は、現在までのところ宮城町内では確認されていないが、奈良、平安時代になると二本松A遺跡、棟林B遺跡、棟林C遺跡、館遺跡・窪遺跡・栗生遺跡など多くの遺跡が知られている。中世の遺跡として郷六館・西館・西館遺跡・馬場遺跡・原館などの館跡や昭和42年に調査された相海塚(志間:1973)などがある。

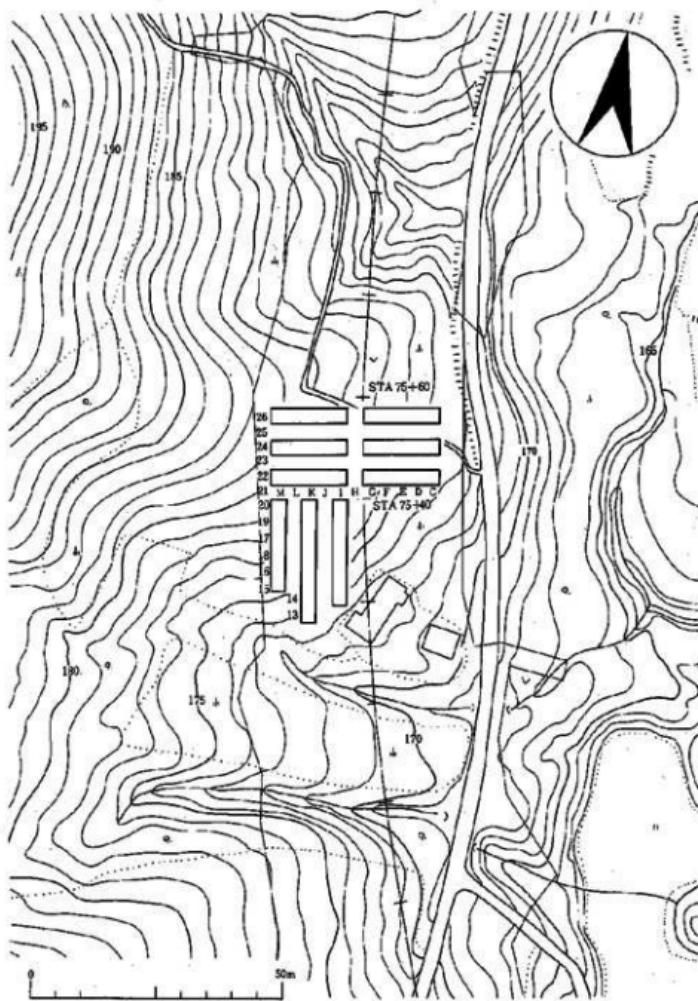
II 調査の経過

調査は、東北自動車道路線敷内約2800m²を対象に、昭和47年11月1日から11月11日までの10日間にわたって実施された。東北自動車道は、遺跡の立地する丘陵を右に緩く弧を描いて南北に横断している。このため、調査区の設定は、遺跡の立地する路線中心杭のSTA75+40とSTA75+60を結ぶ線を南北方向の基準線とし、それに直行するように東西方向の基準線を定めて行った。両基準線をもとに調査対象地区全体に3m四方のグリッドを設定し、グリッドには南から北へアラビア数字で表わす。東から西へはアルファベットで表わすグリッド名を付した。

発掘調査は地形に沿うようにSTA75+40から北では5グリッド単位のトレチ(3×15m)を東西方向に、その南では6~8グリッド単位のトレチ(3×18~24m)を南北方向にそれぞれ3mおきに設定して進めた。調査の結果、各トレチとも20~30cmほどの厚さの表土を剥



第1図 権現森道路と周辺の遺跡



第2図 地形と調査区

離するとすぐに地山面に移行しており、この地山面で遺構等はまったく検出されなかった。また、遺物も調査区の南西部の表土下部を中心に、剥片石器、剥片が少量出土しているだけで、その他に遺物はまったく出土しなかった。このため調査はトレンチ掘りに留め、トレンチの配置図や、断面図の作製、写真撮影等を行なって発掘調査を終了した。

III 調査の成果

1 出土遺物

出土遺物には調査区の南西部を中心として出土した石鏃・石匙・石鎧・不定形石器などの剥片石器と剥片がある。

石鏃(第3図1)

無茎のものが1点ある。基部に深い抉りが施され、両端に逆刺が形成されるが、逆刺の一方は欠いている。a・b両面とも、調整剥離は側縁だけに施されるが、b面の左側縁には調整剥離は施されていない。

石匙(第3図2~4)

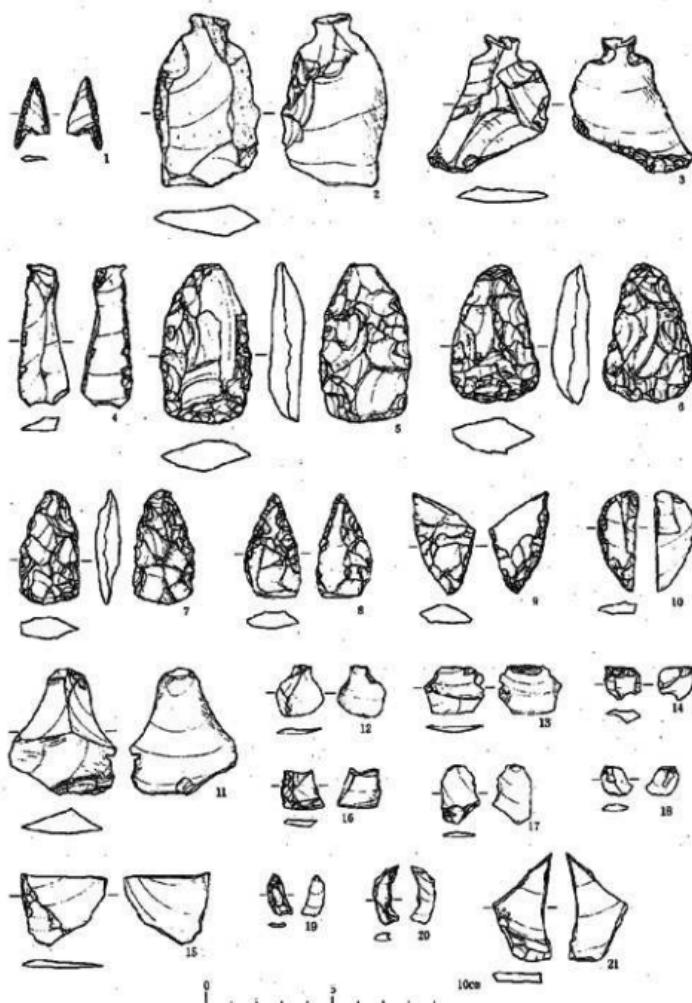
3点出土している。2は縦長の剥片を素材とし、打面と背面の右側縁に自然面を部分的に残している。打面部直下に腹面からの大きな剥離を施してつまみ部を作り出している。背面左側縁に腹面からの小さな、腹面左側縁に背面からの大きな調整剥離を施して刃部としている。背面下辺にも細かな剥離が認められる。3は幅の広い剥片を素材としている。打面は残らないが、打面部直下に背面からの剥離を施してつまみ部を作り出している。下辺左半分に背・腹両面からの、右側縁下端から下辺にかけて背面からの調整剥離が施されている。左右両側縁には細かな剥離が認められる。4は縦長の剥片を素材とするもので、つまみ部の大部分と右側縁から下辺部を欠く欠損品である。つまみ部は打面側に作り出されている。腹面右側縁に背面からの小さな調整剥離が施されている。

石鎧(第3図5~7)

3点出土している。5は上端をわずかに欠くもので、両側縁は強く外弯し、下辺はほぼ直線的な形態をもつ。下辺の調整剥離は主としてb面から施されており、片刃状となっている。6は直線的に下辺に向かってひらく側縁と外弯する下辺とをもつ。a・b両面から施される調整剥離が全周するが、下辺ではb面からの調整剥離が頗著で、片刃状となっている。7はあまり下辺に向かってひらかない形態で、各辺とも直線的な小形のものである。調整剥離はa・b両面から施され全周する。下辺は5・6と異なり両刃状で鋭い。

不定形石器(第3図8~16)

8~10は、尖頭器状の形態をもつものであるが、いずれも欠損品である。8は、背・腹両面



第3図 出土遺物(石器)

に施される調整剝離がほぼ全周するもので、下端を欠いている。9は、a・b両面に調整剝離が施されるが、大半を欠くため、全体形の不明なものである。10も半欠品で全体形の不明なものである。調整剝離は背面にだけ施されている。

11～16は剥片に部分的な調整剝離や使用痕と思われる小さな剝離の認められるものである。11～14は打面を残しており、15・16は被片である。17～21は剥片で、17～19は打面を残す縦長の小剥片で、20・21は剥片の破片である。

第1表石器計測表

番号	種別	地区層位	打面	背面調整	背面調整	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	その他
1	石 鏃	K-14区 1層				28.2	13.3	2.0		岩美奈山産石英斑岩	
2	石 匙	K-15区 1層	有	左側縫 右側縫	右側縫	68.4	41.7	12.5	33.8	*	
3	*	未 定	無	下刃左半分	下刃一辺	54.4	48.0	5.5	11.8	*	
4	*	M-14区 1層	*	—	—	(56.0)	23.0	4.5	5.5	*	半欠品
5	石 斧	K-19区 1層	—	—	—	62.8	35.9	12.0	27.1	*	一部欠損
6	*	I-15区 1層	—	—	—	54.2	34.8	14.0	25.3	*	
7	*	未 定	—	—	—	45.2	23.7	8.0		*	
8	不定形石器	M-14区 1層	—	全 周	全 周	41.4	22.0	6.0	5.5	*	一部欠損
9	*	M-14区 1層	—	—	—	(40.4)	23.8	6.5	5.7	*	半欠品
10	*	K-14区 1層	—	有	無	39.7	(15.2)	5.0		*	
11	剝 片	I-17区 1層	有	—	—	49.7	42.1	6.5	11.6	*	#F(?)
12	*	K-16-14区1層	*	—	—	20.7	13.4	2.0	0.7	*	*
13	*	K-13区 1層	*	—	—	18.9	13.6	2.5	1.2	*	*
14	*	K-16-14区1層	*	—	—	12.6	14.4	6.0	0.8	*	*
15	*	K-19区 ?	—	—	—	(28.2)	(33.6)	3.2	3.2	*	破 片
16	*	K-15区 1層	—	—	—	(17.0)	(15.4)	2.5	0.8	*	*
17	*	K-16-14区1層	有	—	—	23.0	15.0	1.5	0.7	*	
18	*	K-19区 1層	*	—	—	11.4	12.5	2.6	0.5	*	
19	*	K-15区 1層	*	—	—	16.2	9.4	1.0	0.3	*	
20	*	K-16-14区1層	—	—	—	22.9	10.0	3.0	0.6	*	破 片
21	*	K-19-14区1層	—	—	—	(42.4)	(28.6)	5.0	4.9	*	*

2 出土遺物の年代

出土遺物には少量の剥片石器(石鏃・石匙・石斧・不定形石器)と剥片がある。

本遺跡出土の剥片石器のなかで、形態の明らかな石鏃・石匙・石斧などについて、県内の他遺跡出土の類例で比較し、その所属時期を検討してみると、基部に抉りをもつ無茎の石鏃や縦形石匙、石斧などは縄文時代早期中葉以降の縄文時代各時期の遺跡に出土例を認めることができる。さらに、本遺跡出土の石鏃や石斧は、県内では縄文時代早期末～前期初頭の遺跡に特徴的に出土するものと形態的に類似している。このように、本遺跡出土剥片石器は縄文時代早期中葉以降の縄文時代遺跡に類例が認められることから縄文時代に位置付けられるものと考えられ、さらにその一部は縄文時代早期末～前期初頭の遺跡に類例を求めることができる。しかし権現森遺跡から今回出土した剥片石器は量的に少なく、その形態や組成など十分に比較、検討

することができたとは言えず、また、石器群に伴出する土器がまったく認められないため、この点での検討もできなかった。このため本遺跡出土石器群の年代は広く縄文時代と考えておきたい。

IV ま と め

1. 権現森遺跡は国見丘陵の頂点となっている権現森山の東麓緩斜面に立地する遺跡である。
2. 今回の調査では堆積層は表土しか認められず、また、遺構も検出できなかった。出土遺物には少量の石鏃・石匙・石鏡、不定形石器などの剥片石器や剥片などがある。これらの石器は、その形態的特徴や組成などから縄文時代の石器であると思われるが、縄文土器などはまったく伴出していなかったため、細かな所属時期の特定はできなかった。
3. 遺構がまったく検出されないことや、遺物の出土量が少ないとことなどから、遺跡の主体部は今回の調査地点である東北自動車道の路線敷からはずれているものと考えられる。

〈引用・参考文献〉

- 阿部 恵 (1980) : 「宇賀崎貝塚」宮城県文化財調査報告書第67集印所
- 伊東信雄 (1840) : 「宮城県道田郡不動堂村素山貝塚調査報告書」東北帝國大学法文学部奥羽資料調査部研究報告書第二
- 志賀泰治 (1973) : 「宮城町想海塚発掘報告」宮城町文化財調査報告書第1集
- 田中則和 (1973) : 「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報(白石市・仙台市～大和町地区)一権現森遺跡」宮城県文化財調査報告書第31集
- 鳴瀬町教育委員会 (1977) : 「亀岡遺跡・金山貝塚」鳴瀬町文化財調査報告第1集
- 宮城県教育委員会 (1976) : 「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第46集
- 宮城県教育委員会 (1976) : 「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第47集
- 宮城県教育委員会 (1978) : 「東北自動車道遺跡調査報告書I -上深沢遺跡-」宮城県文化財調査報告書第52集

踏 踏 影



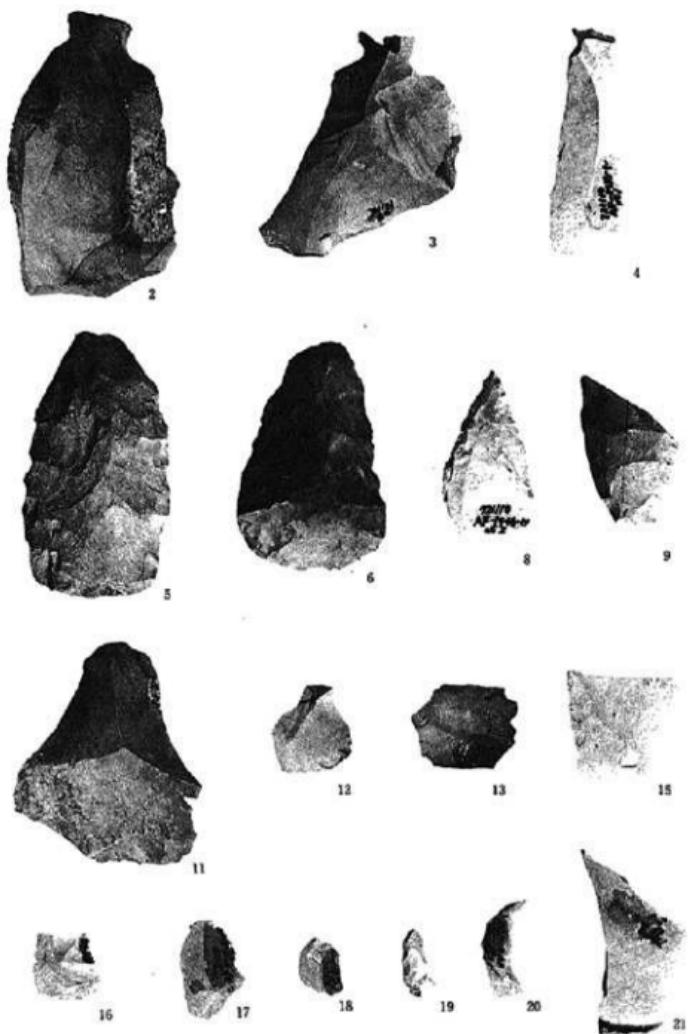
调 查 区



调 查 区



图版 1



图版2 出土遗物

(10) 混内山遺跡

目 次

I. 位置と環境.....	385
II. 調査の方法と経過.....	386
1. 調査の方法.....	386
2. 調査の経過.....	388
III. 調査の成果.....	389
1. 基本層位.....	389
2. 小堅穴遺構.....	390
3. 出土遺物.....	391
IV. 考 察.....	403
A. 出土遺物について.....	403
B. 第Ⅱ層について.....	405
C. 小堅穴遺構について.....	405
V. ま と め.....	405

調査要項

遺跡所在地：宮城県志田郡三本木町蟻ヶ袋字混内山

遺跡記号：BQ（宮城県遺跡地名表登載番号：33022）

調査期間：昭和48年7月23日～8月11日

調査面積：5,000m²

発掘面積：1,125m²

調査員：宮城県教育庁文化財保護課

白鳥良一、工藤信一

協力参加者：後藤勝彦（宮城県塩釜女子高等学校教諭） 石森 勉（東北大学学生）

渋谷勝磨（三本木町立三本木中学校主事） 柳瀬和幸（東北大学学生）

佐藤達夫（塩釜市立塩釜第一小学校教諭）

今泉武男（塩釜市立塩釜第三中学校教諭）

土岐山武（丸森町立筆甫中学校講師）

一条孝夫（塩釜市立浦戸第二小学校教諭）

佐藤正人（東北学院大学学生）

I. 位置と環境

混内山遺跡は、志田郡三本木町蟻ヶ袋字混内山に所在し、三本木町役場の南西約2kmに位置する。

遺跡の所在する三本木町周辺の地形を概観すると、三本木町の中心部を鳴瀬川が東流しており、その北には江合川、鳴瀬川によって形成された大崎平野が、その南には、西から東になだらかに延びる大松沢丘陵が横たわっている。大松沢丘陵は、端部で多数の枝状丘陵を形成する。

混内山遺跡は、大松沢丘陵の北側に発達する枝状丘陵のひとつに立地している。さらに、この丘陵は、最も高い所で68.6mの標高をもち、南北にかけて小起伏が認められる。この丘陵の左右には、南から北に延びる二つの沢が形成されている。遺跡の立地する丘陵は、その突端部



と東側の基部付近に緩斜面を形成するが、その外は急である。遺跡は、この東側に形成される緩斜面に立地している。また、緩斜面の北側、南側を小さな沢が区画している。遺跡付近の標高は、26～33mで、緩斜面の東側に面する沢との比高差は、約3mある。現状は、大部分が山林で、一部が畠地となっている。

本遺跡の立地する大松沢丘陵や周辺の沖積地には、次の様な遺跡がある（宮教委：1976）。

縄文時代の遺跡としては、混内山遺跡を始めとして、三本木山遺跡、名高田遺跡、壇ヶ森遺跡が沢に面した丘陵斜面に立地している。今回発掘調査された混内山遺跡を除いて、詳細な調査は行われていないが、三本木山遺跡で縄文土器が、名高田遺跡、壇ヶ森遺跡で石器が採集されている。

古墳～平安時代の遺跡としては、舟場遺跡、中沢遺跡、引田遺跡、天王河原遺跡が知られている。これらの遺跡は、沖積地の自然堤防に立地している。舟場遺跡は、発掘調査されている。引田遺跡から土器（壺、壺）が採集されている。また、装飾横穴古墳として著名な山畠横穴古墳群を始めとして多くの横穴古墳が丘陵斜面に、高塚古墳として知られる蒜袋古墳、八坂神社古墳が沖積地や丘陵尖端に立地している。山畠横穴古墳群では、3基の装飾古墳が発見されている（宮教委：1973）。

中世～近世の遺跡としては、桑折城跡を始めとして多くの城・館が鳴瀬川南岸の丘陵突端部を中心として立地している。これらの城・館の規模、構造等は、徐々に明らかにされてきている（柴桃：1973、小井川：1979）。また、中世陶器の生産の場として知られる名高田窯跡、芦ノ口山窯跡が丘陵斜面に立地している。名高田遺跡の発掘調査によって、窯の構造や擂鉢・壺・甕等の雜器が生産されていたこと等が明らかにされている（藤沼他：1978）。

以上のことから、縄文時代以降、各期の遺跡があるが、特に古墳時代以降の遺跡が多く目立つと言える。

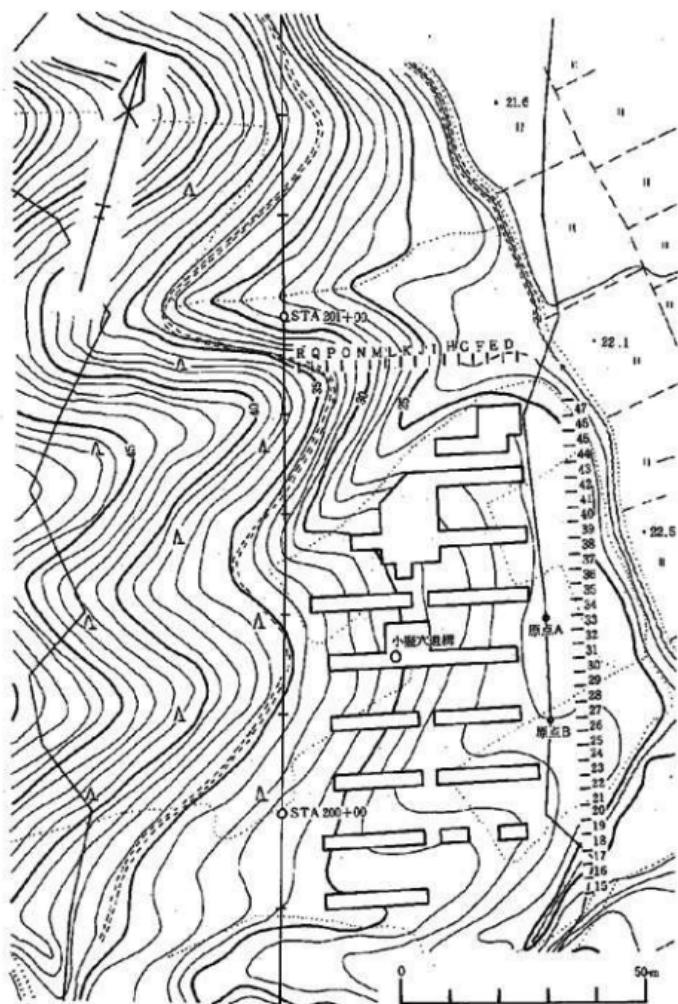
II. 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査は東北自動車道の路線敷を対象として行ない、遺物散布の認められた路線敷東側を調査区とした。

調査区には、自動車道中心杭S T A200+40（原点A）とS T A200+20（原点B）とを結ぶ直線を南北の基準線とし、それに直交する東西の直線を設け、3m単位のグリッドを組んだ。グリッドには、南北方向をアラビア数字で、東西方向をアルファベットで表わした。

発掘の方法としては、7グリッドを単位としたトレーナーを北から南に向けて三列おきに設定し、グリッド毎に掘り下げた。なお、必要に応じて、拡張区を設けて調査を行った地区もある。



第2図 混内山遺跡地形図・グリッド配図

2. 調査の経過

昭和48年7月23日に発掘調査を開始した。

初めに、路線敷となる5,000m²について調査区を設定し、地形にあわせて発掘地点を選定しながら次のように調査を進め、計1,125m²を発掘した。

調査は、初め調査区北側を中心に行った。この調査区の表土を掘り下げたところ、表土下に縄文土器を包含する黒褐色土層を確認した。その後の調査は、黒褐色土層の広がりを把握することを目的として進め、調査区の中央から南側にかけて表土を掘り下げた。その結果、黒褐色土層は、調査区南端、東端を除いて、調査区のほぼ全域に広がっていることが明らかになった。

次に、黒褐色土層の性格及びその土層下の状況を把握することを目的として、調査区の北側及び中央に広がる黒褐色土層を掘り進めた。その結果、黒褐色土層は、縄文土器、石器を含んでおり、黒褐色土層は、5~50cmで地山に達することが分かった。さらに、調査区中央の地山面で、平面形が梢円形を呈す小竪穴遺構1基を確認した。その後は、調査区南側に広がる黒褐色土層を掘り進めると同時に、小竪穴遺構の精査を進めた。

以上、調査の結果、縄文時代の遺物を包含する黒褐色土層を確認し、合わせて小竪穴遺構1基を検出することができた。調査は、8月11日をもって終了した。

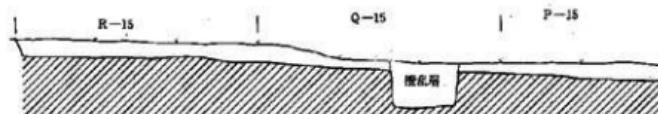
III. 調査の成果

既に述べたように、小堅穴遺構1基と遺物を包含する黒褐色土層を確認した。遺構の検出及び出土遺物は少なかったが、表土から、縄文土器、石器、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器が、黒褐色土層から縄文土器が出土している。

1. 基本層位

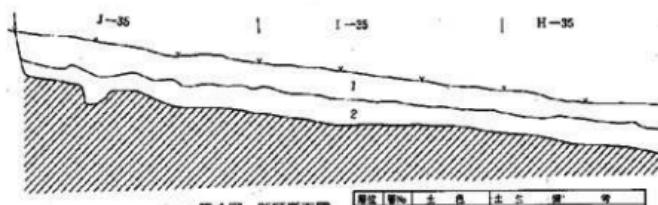
第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黒褐色土層に大別できるが、調査区によっては、地山層まで深すぎるため、掘り下げる困難と判断し、地山層まで達しない箇所がある。以下、大別した層毎に記述する。

第Ⅰ層：黒褐色、褐色シルト層で表土である。その厚さは、約10~70cmある。調査区北側一部で、最近のものと思われる積土層(厚さ20~70cm)が耕作土上に認められた。出土遺物として縄文時代早期・前期・中期・晚期の土器及び石器、土師器、須恵器。



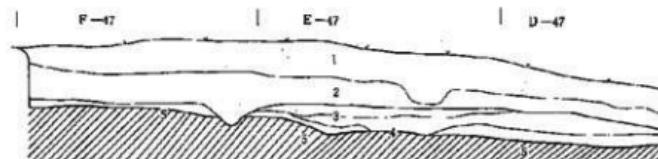
第3図 15区断面図

層位/層名	土色	土質	特徴
1 黒褐色シルト	黒褐色	シルト	耕作土
2 細粒土	褐色	シルト	耕作土



第4図 35区断面図

層位/層名	土色	土質	特徴
1 黒褐色シルト	黒褐色	シルト	耕作土
2 細粒土	褐色	シルト	耕作土であり、柱あり



第5図 47区断面図

層位/層名	土色	土質	特徴
1 黒褐色シルト	黒褐色	シルト	耕作土であり、柱あり
2 黒褐色シルト	黒褐色	シルト	耕作土であり、柱あり
3 黒褐色シルト	黒褐色	シルト	耕作土であり、柱あり
4 黒褐色シルト	黒褐色	シルト	耕作土であり、柱あり
5 黒褐色シルト	黒褐色	シルト	耕作土であり、柱あり

赤焼土器、中世陶器がある。

第II層：大部分黒褐色シルト層であるが、部分的には、暗褐色を呈している。調査区によつては、2層～5層に細別できる所もある。層の厚さは、調査区により異なるが5cm～50cmある。調査区の南端及び東端を除き、調査区のほぼ全域に分布し、西から東に地形に沿うように緩やかに傾斜している。この層から、縄文時代早期・前期の土器を主体として、中期～晩期の土器及び石器が出土している。

2. 小豊穴遺構

遺構の確認：L-31区からM-31区にかけて、第II層下の地山面で確認された。

重複・改築：遺構の西側で地山まで達する新しい掘り込みが認められた。

平面形：南北に長い楕円形である。長軸は、長さ2.25mである。短軸は、長さ1.90mである。

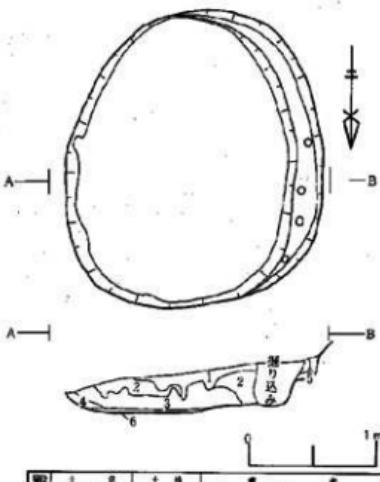
堆積土：遺構内に堆積している層は、6層に細別できる。第1層は、遺構の西側から東側にかけて緩やかな傾斜をもつて分布する。第2層は、ほぼ水平に堆積し、一部で床面に達する。第3層は、東壁付近で東から西に傾斜をもち、中央付近でほぼ水平に堆積している。第4層は、東壁に沿い、西から東に傾斜をもつて堆積している。第5層は、西壁に沿い、東から西に傾斜をもつて、堆積している。第6層は、東壁付近から中央付近に分布し、かなり薄い厚さをもち床面上に堆積している。

壁：東壁は、大部分削平され、壁高10cmを測る。西壁は、段との比高差25cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面：遺構の西壁に沿って、南から北にかけて三日月状の形態をなす段が認められる。段は、床面から18cmの比高をもち、地山を削平して、ほぼ水平に形成されている。この段上で4つのピットを検出している。

段以外の床面は、多少の凹凸はあるが、ほぼ水平である。

出土遺物：平面形確認時に、遺構堆積土層上面で縄文土器2片出土したのみ



層	土 壤	特 徴
1 黒褐色2.5V14	シルト	軟弱なし、しまってない。底面粒子が混じ、含む
2 暗褐色2.5V14	シルト	堅強やや柔らか、しまってない。シルトを表面に含む
3 黒褐色2.5V14	サンドイ・チャリ	堅強あり、しまってない。コームを下へ傾いて含む
4 暗褐色2.5V14	シルト	堅強やや柔らか
5 オリーブ褐色2.5V14	シルト	堅強なし、しまってない。
6 黒褐色2.5V14	シルト	堅強あり、しまってない。表面含む

第6図 小豊穴遺構

で、他に遺物は出土していない。

3. 出土遺物

表土及び第III層から出土した遺物は、平箱3箱分に相当する。遺物の中には、縄文土器、石器、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器などがあるが、大部分は縄文土器である。いずれも、小破片が多く、須恵器、赤焼土器、中世陶器などがあるが、大部分は縄文土器である。いずれも、少破片が多く、須恵器壺1固体を除き復原可能な土器はなかった。

(1) 縄文土器(第7図～第9図)

縄文土器は、全部で893点出土している。そのうち、胎土に纖維を含んでいるものは、587点、胎土に纖維を含んでいないものは306点である。いずれも、小破片で占められ、土器全体の器形及び文様を知ることは難しい。そこで、縄文土器を口縁部・体部・底部の部位毎に分け、胎土、成形、調整、器形、文様を観察した。その結果、同じ特徴をもつ幾つかの土器群に類別できた。また、縄文土器は、早期～晚期の5時期に亘っていることから、時期毎に分け、口縁部・体部資料・底部資料について類別し記述する。なお、胎土に纖維を含まず器外面に縄文のみ施文したものも認められたが、それらは、前期中葉以降のものと考えられるが、類別せず第4表に載せた。

(a) 口縁部・体部資料

縄文時代早期の土器(1～26)

I類(1～11)、沈線文や刺突文が施されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部には、波状を呈し、外傾しながらその上部で内弯するもの(1～3)、波状を呈し、外反するもの(5)、平縁を呈し外傾するもの(11)がある。口唇部には棒状工具を用いて押し引き手法による連続刺突文を施したり(1～3、5)、半截竹管を用いて刻目を施したり(11)している。口縁部の文様には、口縁部上端に横走する溝状の沈線(溝状文)をもち、矢羽根状の連続刺突文を施すもの(1～4)、波頂部下に紡錘状の凹文をもち、矢羽根状の連続刺突文を施すもの(5)横走する平行沈線と斜走する平行沈線間に貝殻腹縁文を施すもの(11)がある。体部の文様には、横「八」の字型を呈す刺突文を施すもの(6、7)、弧状(8)・「く」の字状(9)、鉤状(10)の連続刺突文を施すものがあり、いずれも横位に施される。

胎土には、纖維を含まず堅くしまっている。器面は、内外面ともミガキによる調整が施され、平滑である。

II類(12、13)：貝殻腹縁文が施されるもの

胴部破片である。貝殻腹縁文は、浅く、横位に施文される。胎土に、纖維を含まず、堅くしまっている。器面は、内外面ともミガキによる調整が施されるもの(12)と内面にミガキによる



第7図 第1層・第2層出土遺物

調整、外面に浅い擦痕の認められるもの（13）がある。

III類(4~17)：器外面に擦痕の認められるもの

体部破片である。体部の文様として、半截竹管と思われる施文具で平行沈線文を施文（14、15）している。器外面の擦痕は、斜位、横位の方向に認められる。胎土に繊維を含まず堅くしまっている。器内面は、ミガキによる調整が施され、平滑である。

IV類(18~23)：器内面に条痕(縄文)、器外面に縄文(条痕)の認められるもの

口縁部・体部破片である。口縁部には、小波状を呈し外反するもの（18、19）がある。装飾文様をもつものには、口唇部にヘラ状工具と思われる施文具で刻目を施し、口縁部と胴部の境に原体LRの圧痕を施すもの（19）、口唇部及び口縁部上端を横走する隆帶上に半截竹管と思われる施文具で刺突し、さらに、その隆帶下に下垂する5条の沈線文をもつもの（19）、胴部に隆帶

を施し、その隆帶上に刺突文をもつもの(20)がある。

地文として、内面に斜行縄文LRを横位に施文するもの(19)、外面にのみ羽状縄文RL・L R(22)、羽状縄文RL×LR¹³(23)、斜行縄文LRを横位に施文するものの(18、21)、がある。18以外は、胎土にすべて繊維を含む。

V類(24)：器内外面に縄文が施されるもの

体部破片である。体部に指頭状の圧痕文をもち、器内外面とも、斜行縄文LRを横位(外面は部分的に縦位)に施文している。胎土に繊維を含み、堅くしまっている。

以上の外に、外面無文のもの(25、26)が認められる。器内面に浅い擦痕が認められるもの(25)などがあり、II類に含まれるかもしれない。しかし、体部破片なので、はつきりしない。

注1. 羽状縄文には、結束のあるものと結束の認められないものがある。両者を区別するために、前者をRL×LR後者をRL・LRと表記する。

縄文時代前期の土器(27~88)

すべて、胎土に繊維を含むもので、概して脆い。全体の文様は明らかでないが、次のように類別できる。

I類(27~38)：羽状縄文が施されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部には、口縁部上端に刻目を施すものと施していないものがある。前者の口縁部は、平縁を呈し外傾する(27、28)。28は、波状突起をもつ。刻目は、口縁部上端に下方、上方から施文具を交互に押し当てて施したり(27)、口縁部上端上方から下方へ先の鋭いヘラ状工具で細長い刻目を施すもの(28)がある。後者の口縁部には、平縁を呈し外傾するもの(29、30)、平縁を呈し外反するもの(31、32)がある。

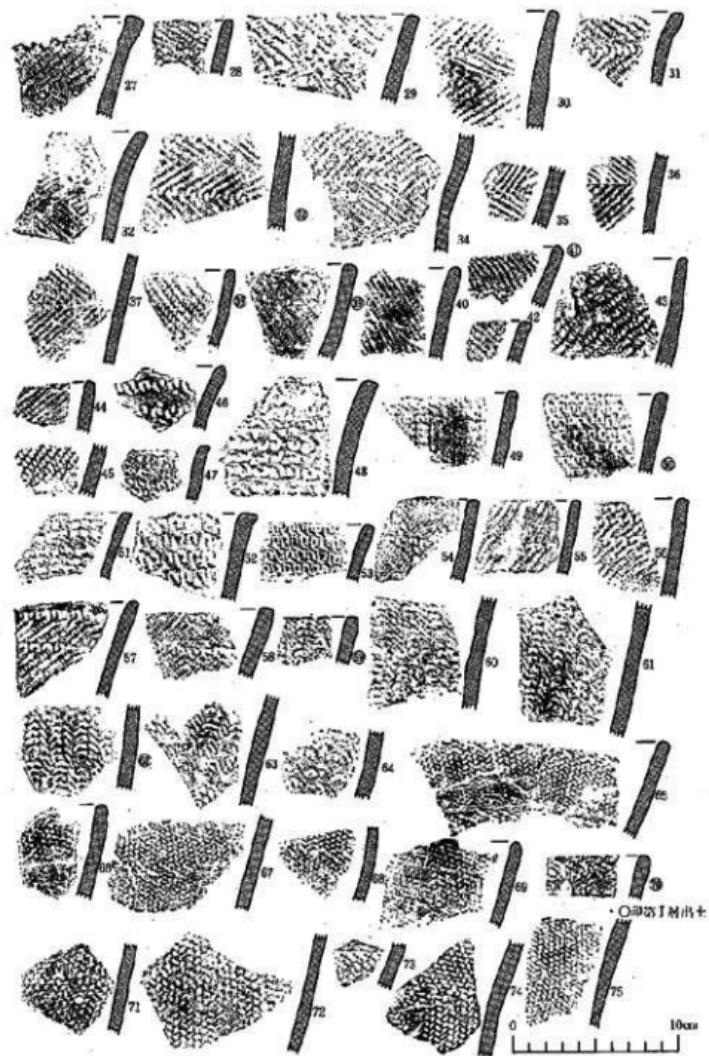
原体は、RL×LR(27~34)、RL・LR(35~37)、LRL・R LR(38)があり、全て横位に施文される。これらの中には、多条の原体を用いているものもある(36、37)。器内面は、ミガキによる調整がなされている。

II類(39~45)：斜行縄文が施されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部には、平縁を呈すもの(38、42~44)、波状を呈すもの(38~40)があり、内弯気味のもの(39)以外は、外傾している。原体は、L(44)、RL(39~42)、LR(43)、LRL(45)があり、いずれも横位に施文されている。器内面及び口唇部、口縁部上端は、ミガキによる調整がなされている。

III類(46~64)：ループ文が施されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部には、波状突起をもち外反するもの(46)、平縁を呈し外反するもの(47、48)、平縁を呈し外傾するもの(49~59)がある。ループ文には、原体末端にのみループを形成するもの(謂ゆる末端ループ文)(46~58)と原体側面に幾つかのループを形成する



第8圖 第Ⅰ層・第Ⅱ層出土遺物

もの(側面ループ文^{注2}(59~64)が認められ、前者は、さらにループ文が数段に施文されるもの(46~53)と一段に形成されるもの(54~58)がある。原体は、R(46~48)、RL(49~54、59~64)、LR(55~58)があり、すべて横位に施文されている。器内面及び口唇部、口縁部上端はミガキによる調整がなされている。

注2. ループ文の名称は、山内氏による(山内:1979)。

IV類(65~77) : 繩紐回転文が施文されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部はすべて平縁を呈し、波状突起をもち内弯するもの(66)、波状突起をもち外傾するもの(65、69)、外傾するもの(70)がある。原体は、rrℓ ℓ(65~68)、RRLL(69~73)、LLL(74~76)、LLRR^{注3}(77)があり、すべて横位に施文されている。器内面及び口唇部、口縁部上端は、ミガキによる調整がなされている。

注3. 繩文原体の表記法は、貝崎貝塚(大宮市教委:1978)で用いた方法を参考とした。

V類(78~81) : 結節文(綾絡文)が施されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部には、すべて平縁を呈し外傾するもの(78)波状突起をもち内弯するもの(79)、波状突起をもち外反するもの(80)がある。原体は、RL(78~80)、ℓ(81)の2種類認められ、いずれも横位に施文されている。器内面及び口唇部、口縁部上端は、ミガキによる調整がなされている。

VI類(82~88) : 摊糸文が施されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部には、平縁を呈し外傾するもの(82~87)がある。摊糸文には、摊紐を単軸に一方向に巻きつけて施文するもの(狭義の摊糸文)(82~85)、左(右)方向に巻きつけたのち右(左)方向に巻きつけて施文するもの(網目状摊糸文)(87、88)、不整摊糸文(86)の3種類認められる。原体は、L(82~85)、ℓ(86、87)、R(88)があり、すべて横位に施される。

器内面及び口唇部は、ミガキによる調整がなされている。

縄文時代中期の土器

隆沈文(89~92)や沈線文(93)が施されている。口縁部、体部破片である。口縁部は、すべて平縁を呈し、内弯するもの(90、92)、内弯しながら口縁部上端で外傾するもの(91)がある。口縁部に施される隆帶は、いずれも調整され、溝状の沈線文を形成するもの(90、91)、渦巻文を形成するもの(92)がある。体部には、「フ」の字状の隆帶を調整した文様をもつもの(89)と縦位に調整された沈線による区画文を施し、磨消縄文を伴うもの(93)がある。隆帶の断面は、三角形(90、92)、蒲鉾型(91)を呈す。地文として、斜行縄文LRを横位に施文するもの(91)、縦位に施文するもの(93)がある。器内面は、いずれもミガキによる調整がなされている。

縄文時代後期の土器(94)

沈線文が施される口縁部破片である。口縁部は、波状を呈し外傾する。口縁部は無文で、沈

線による区画文を施しているが、全体の文様構成は不明である。地文として、斜行縄文を施しているが、原体は不明である。器内面の調整は磨滅が著しく不明である。

縄文時代晩期の土器(95~97)

I類(95、96)：沈線文が施されるもの

口縁部・体部破片である。口縁部は、二個一対の突起をもち外反するもの(95)がある。口唇部に沈線を施し、口縁部に横走する3条の沈線を施すもの(95)、体部に横走する4条の平行沈線文を施すもの(96)があるが、ともに全体の文様構成は不明である。地文として、斜行縄文を施文しているものがあり、原体は、L R (95)であり、横位に施文されている。器内面及び口縁部は、ミガキによる調整がなされている。

II類(97)：器外面無文のもの

口縁部破片である。口縁部は、平縁を呈し外反する。器内面に横走する1条の沈線を施している。器面は、内外面ともミガキによる調整がなされている。

(b) 底部資料 (第1表)

繊維を含んでいるもの(A類)と繊維を含んでいないもの(B類)とに大別できる。

A類(98~108)：繊維を含んでいるもの

底部形態により、尖底(I類)、平底(II類)に分けられる。

I類(99)：尖底のもの

尖底部が乳頭状を呈すものである。縄文は施されているが、原体は不明である。

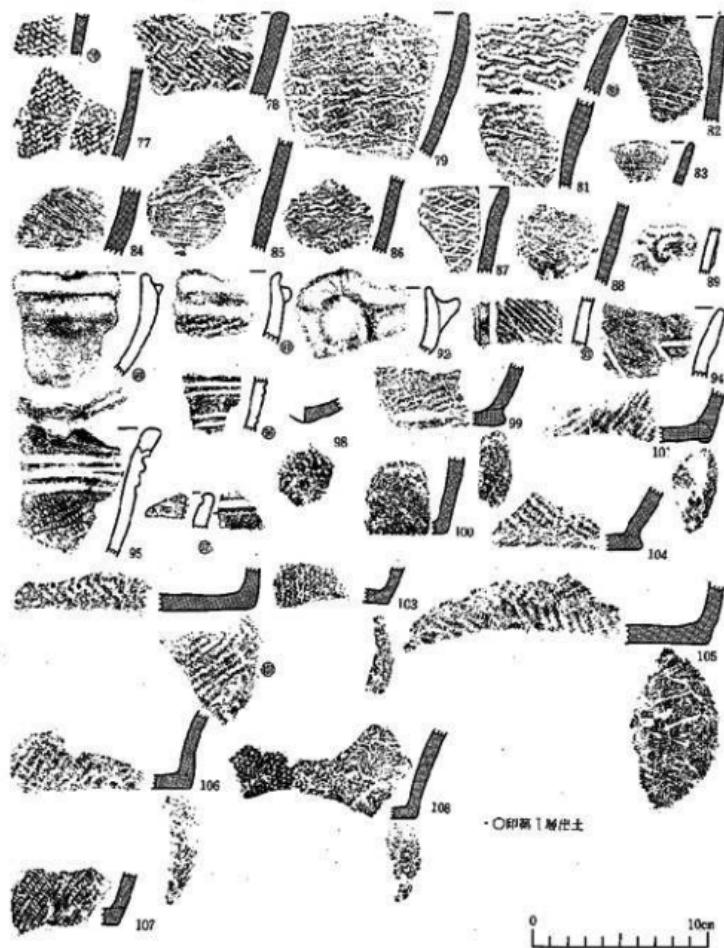
II類(99~108)：平底のもの

底面の状態により、次のように類別できる。

1. 底面が丸底風平底を呈すものである。底部外縁の張り出すもの(99)、張り出さないもの(100)がある。99は、底部外面に木葉痕が認められる。
2. 底面がやや揚底を呈すものである。底部外縁の張り出すもの、張り出さないもの(101~103)があり、全て底部外面に縄文が施文される。木葉痕の認められるものもある。
3. 底面が平底を呈すものである。底部外縁の張り出すもの(104)、張り出さないもの(105~108)があり、前者には、底部外面に木葉痕が認められ、体部下半に貝殻腹縁文を施文するもの(104)、後者には、底部外面に斜行縄文L Rが施文されるもの(106)がある。

B類：繊維を含でいないもの

底部形態及び底面の状態が平底を呈すものである。底部外縁の張り出さないものが認められた(第1表)。



第9図 第I層・第II層出土遺物

(2) 土師器

土師器土坏（2点）、甕（36点）の2種類、合計38点出土している。

第1表 底部分類表

出土	底部形態	底面の状態	底部外縁の特徴	底部外面の跡文	体部下半の地文	
					不明	・
A類 （縫接を含むもの）	I. 尖底	1. 丸底風平底	・盛り出すもの	・不明（木漆痕）	斜行縞文	L.R
			・盛り出さないもの	・不明	斜行縞文	R.L
		2. 扁 瓶	・盛り出すもの	①斜行縞文	斜行縞文	L.R
			・盛り出さないもの	*	斜行縞文	L.R
			・	②縫接縞文	斜行縞文	L.R
	II. 平底	3. 扁 瓶	・盛り出すもの	・不明（木漆痕）	斜行縞文B、具強調縞文	R.L
			・盛り出さないもの	・不明	*	R.L・L.R
		4. 扁 瓶	・斜行縞文	・	斜行縞文	L.R
			・不明	・	斜行縞文	R.L・L.R
			・不明	・	斜行縞文	R.L
B類 （縫接しないものを）	I. 平底	5. 扁 瓶	・盛り出さないもの	・不明	斜行縞文	L.R
			・盛り出し不規	・不明	斜行縞文	L.R
		6. 扁 瓶	斜行縞文	・不明	斜行縞文	L.R
			・不明	・不明	斜行縞文	L.R
			・不明	・不明	斜行縞文	L.R

壊には、口縁部、体部破片、甕には体部破片がある。いずれも磨滅が著しく製作技法、器面調整の不明瞭なもののが殆んどである。図示可能なものは1点もない。第2表のようにまとめた。

(3) 須恵器(第10図)

壊(2点)、甕(3点)の2種類、合計5点出土している。

壊(109)：口縁部を欠く壊である。底部の切り離し技法が凹溝糸切りのもので再調整は施されていない。全体の器形は不明である。

甕(110～112)：いずれも、体部破片で、内面はナデによる調整がなされ、外面に平行叩き目が認められる。

(4) 赤焼土器(113)

壊の底部破片が2点出土している。全体の器形は不明である。

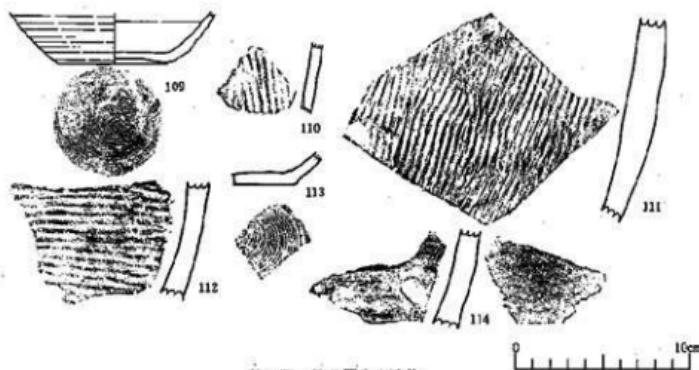
(5) 中世陶器

擂鉢の体部破片が1点出土している(114)。

擂鉢：ロクロを使用している。内面は、ナデ調整を施しているが、外面は再調整されていない。使用痕跡は、認められない。

第2表 土師器破片集計表

器種	名 称	表面調節法		4号 1号 2号	不明	合計
		内面	外縁			
壊	木 槌 - 不 壊	1	1	1	1	2
甕	木 槌 - 不 壊	1	1	1	1	2
木 槌	ヘラナギ - ハタナギ	1	1	1	1	2
木 槌	ケズノ - 刮削	1	1	1	1	2
木 槌	ケズノ - 不 壊	1	1	1	1	2
木 槌	木 槌 - パ	1	1	1	1	2
木 槌	木 槌 - 刮削	1	1	1	1	2
木 槌	木 槌 - 不 壊	1	1	1	1	2
合 计		2	2	2	2	8



第10図 第I層出土遺物

(6) 石器 (第11、12図)

磨製石斧1点、石鎌2点、石匙6点、石鏟4点、不定形石器5点の合計18点出土している。

磨製石斧(115)

完形である。平面形は、頭部から刃部にかけて幅が広くなり、刃部に丸みをもつものである。横断面形は、縁部に丸みを帯び、胴部にややふくらみをもつ長方形をなす。a・b両面とも磨滅が著しく、a面の刃部にのみ擦痕が認められる。

石鎌(116、117)

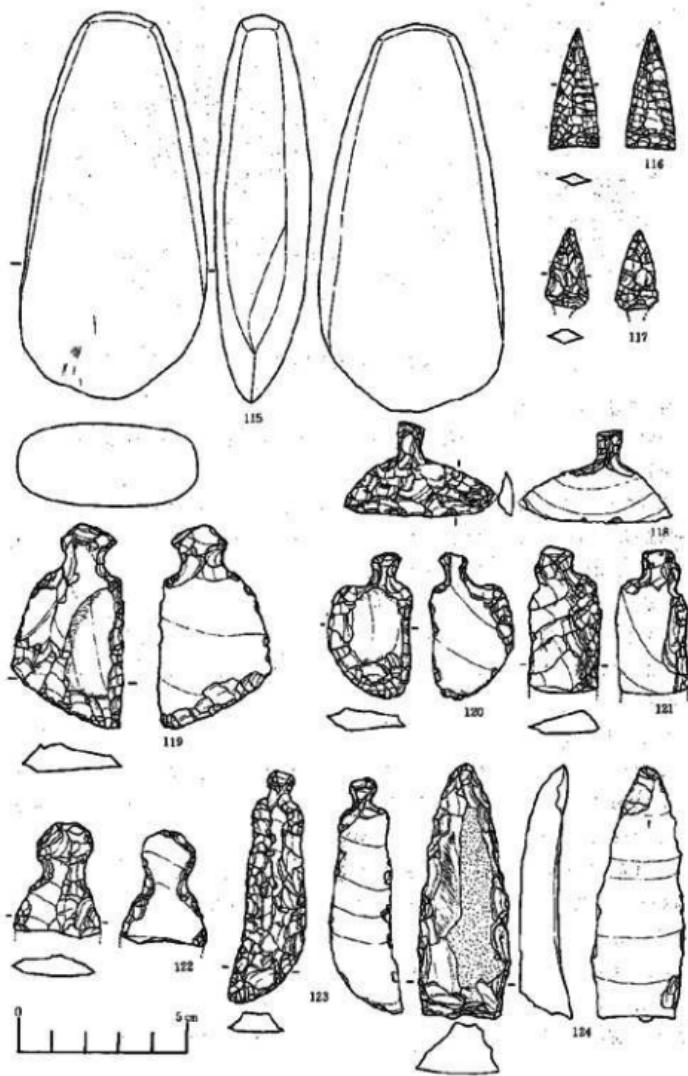
無茎で二等辺三角形を呈しているもの(116)、有茎であるが、茎部を欠損し、底辺で外側にややふくらみをもち、二等辺三角形を呈しているもの(117)がある。いずれも、横断面形は菱形状を呈している。

石匙(118~123)

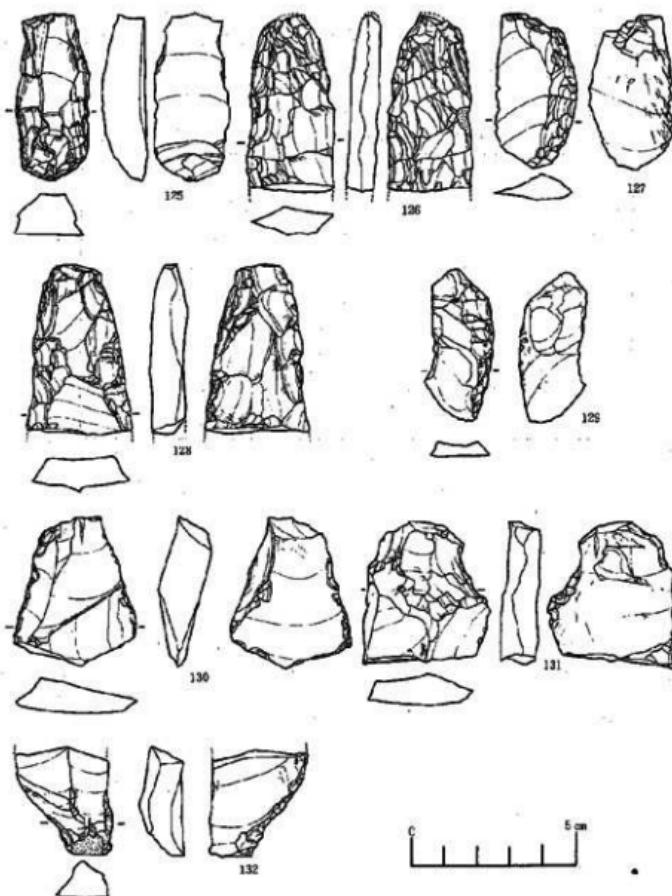
完形のもの(119、120、123)と一部欠損しているもの(118、121、122)がある。平面形の違いにより、横型(118)と縦型(119~123)が認められる。a面を観察すると、周縁にのみ調整剥離を加えているもの(119、120)、素材のほぼ全面に調整剥離を施しているもの(118、121~123)がある。b面を観察すると、縁辺に調整剥離を施すもの(119~122)と施さないもの(123)がある。断面形は、凸レンズ状を呈するもの(118~122)、蒲鉾型を呈するもの(123)がある。

石鏟(124~127)

完形のもの(124、125)以外は、全体の半分ほど欠損している。a面のみに調整剥離を施すもの(124、125)、a・b両面の全面に調整剥離を施していると思われるもの(126、127)がある。横断面は、蒲鉾型を呈するもの(124、125、127)、と凸レンズ状を呈するもの(126)がある。



第11圖 第Ⅰ層・第Ⅱ層出土遺物



第12圖 第1層・第Ⅰ期出土遺物

不定形石器 (128~132)

一部欠損しているもの (132) 以外は完形である。いずれも、側刃のみに調整剝離が認められる。横断面は、凸レンズ状 (128、130)、台形状 (129、132) を呈している。

第3表 石器計測表

No.	種別	石種	$\frac{L_{max}}{mm}$	$\frac{W}{mm}$	$\frac{H_{max}}{mm}$	$\frac{W}{L_{max}}$	$\frac{H}{L_{max}}$	出土地区	層位	周	寺
115	磨製石斧	石英安山岩	114.5	53.7	26.5	0.48	0.23	J-43	I	完	
116	石	綠色頁岩	35.2	14.5	3.5	0.9	0.1	不明	完	不明	
117	石	玉ずい	23.4	12.9	3.5	0.7	0.1	不明	不明	不明	
118	石	綠色頁岩	27.8	44.0	5.5	0.4	0.2	不明	不明	完	
119	石	石	*	57.9	36.0	0.8	0.6	17.5	G-35	I	完
120	石	石	*	42.5	24.7	6.8	0.6	5.7	I-N-38社	不明	完
121	石	石	*	70.5	19.5	8.2	0.9	0.1	不明	完	
122	石	石	*	42.6	21.2	7.5	0.5	7.6	不明	不明	手欠
123	石	石	*	34.0	25.8	6.4	0.8	4.3	不明	不明	手欠
124	石	石	*	75.2	27.5	15.1	0.3	20.1	不明	不明	完
125	石	石	*	50.2	22.6	11.2	0.4	16.3	不明	不明	完
126	石	石	*	49.6	31.8	11.0	0.6	19.1	I-35	I	手欠
127	石	石	*	53.8	26.0	6.8	0.5	15.7	D-39	不明	手欠
128	不定形石器	透紋麻質灰岩	47.3	24.9	6.5	0.5	0.1	不明	完	不明	
129	不定形石器	綠色頁岩	45.9	22.2	6.9	0.5	0.1	不明	完	不明	
130	不定形石器	*	42.1	37.7	10.4	0.9	0.2	不明	手欠	不明	
131	不定形石器	*	45.4	27.2	12.3	0.6	0.3	E-31	I	完	
132	不定形石器	*	29.0	38.2	12.8	0.8	0.4	不明	手欠	不明	

IV. 考 察

A. 出土遺物について

1. 縄文土器

口縁部、体部資料は各時期毎に分け、器外面に施文される文様の特徴によって類別できた。底部資料は、繊維を含んでいるもの（A類）と繊維を含んでいないもの（B類）とに大別し、さらに底面の形態、底部外縁等の特徴から類別した。ここでは、類別した土器の所属時期を明らかにするために、宮城県内や隣接地域における類例と比較し、検討する。

（1）口縁部、体部資料について

縄文時代早期の土器

胎土に繊維を含まず沈線文や押し引き手法による連続刺突文で文様を構成するI類は、蛇王洞穴（芹沢・林：1965）、明神裏遺跡（林：1962、白石市史編纂委員会：1976）に類例が見られ、早期中葉明神裏III式とされている。

II類は、胎土に繊維を含まず体部に横位の貝殻腹縁文帯をもつものである。全体の文様は不明であるが、このように貝殻腹縁文が独立して文様を構成する類例として、吉田浜貝塚（後藤：1968）、大寺遺跡（興野：1970）、山前遺跡（小牛田町教委：1976）に見られ、早期中葉大寺式とされている。

III類は、胎土に繊維を含まず、器外面に擦痕の認められるものである。これらは、明神裏遺跡（白石市史編纂委員会：1976）に類例が見られる。しかし、明神裏遺跡では、他の土器との共伴関係が明らかにされておらず、所属時期は明らかでない。

器内面に条痕（縄文）あるいは、器外面に縄文（条痕）の施文されるIV類は、素山貝塚（伊東：1940）、船入島貝塚（角田：1936）、南境貝塚（宮教委：1969）に類例が見られ、早期末素山II式とされている。

器内外面に縄文の施文されるV類は、早期末素山II式以降梨木畠式（林：1964）までに見られる。しかし、器内面の口縁部に縄文が施文される素山貝塚や上川名貝塚（加藤：1952）出土例より、「器内面の縄文施文は著しく、底部付近にまでおよぶばあいもある。」（林：1964）という梨木畠貝塚出土例により類似している。

縄文時代前期の土器

I類からVI類まで、すべて胎土に繊維を含み、羽状縄文、斜行縄文、ループ文、組紐回転文結節文（綾絡文）が施されるものである。これらは、金山貝塚（鳴瀬町教委：1977）に類例があり、前期初頭と考えられる。これらの中でもI類の27、28は、地文として結束された羽状縄文を施文し、口縁部上端に刻目の認められるものである。上川名貝塚（加藤：1952）、桂島貝塚（林：1960）、

金山貝塚(鳴瀬町教委:1977)、左道貝塚(白鳥:1978)に類例が見られ、前期初頭上川名II式あるいは、桂島式(林:1960)とされている。また、VI類(撫糸文)の不整撫糸文については、大木I式の後半に発生し、口縁部のみに施文されうるという見解がある(奥野:1967)。

縄文時代中期の土器

「フ」の字状の隆帯を調整した文様をもつ89、溝状の沈線文を形成する90、91は、中期中葉大木8b式とされている。隆帯による渦巻文を形成する92、沈線による区画文をもち、磨消縄文を伴う93は、中期後葉大木9式とされている。

縄文時代後期の土器

小破片のため文様構成が不明瞭であるが、口縁部が無文で、調整された沈線による区画文が推定できる。文様の特徴から、後期初頭に位置づけられると思う。

縄文時代晩期の土器

横走される沈線文が施されるI類、口縁部無文で内面に1条の沈線をもつII類は、晩期後半とされている。

(2) 底部について

織維を含んでいるもの(A類)と織維を含んでいないもの(B類)とに大別できる。さらに、A類は、底面の形態により、尖底(A I類)、平底(A II類)に類別できる。

A I類は、尖底部が乳頭状を呈す特徴をもつ、尖底土器は、一般に縄文時代早期の特徴とされているが、金山貝塚をはじめとして前期初頭に位置づけられる土器群の底部にも尖底は認められるため、早期～前期初頭に位置づけられると思う。

A II 1～3類は、丸底風平底(A II 1類)、揚底気味の平底(A II 2類)、平底(A II 3類)を呈すものである。これらは、上川名II式～大木I式とされている。

B類は、織維を含まない単純な平底である。全体の特徴を明確に把握ことができなかつたが、前期中葉以降と思われる。

以上のことから、本遺跡出土縄文土器には、古くは、早期中葉明神裏III式にまできかのぼり、大寺式、素山II式、上川名II式、大木I・2式、大木8b式、大木9式、後期初頭、晩期後半に属するものが含まれている。

2. 土師器

土師器は、小破片かつ磨滅が著しく、所属時期は、明らかにできない。

3. 須恵器

ロクロを使用している壺2点と器外面に平行叩き目の認められる甕3点の僅かしか出土していない。そのうち、壺(129)は、製作技法の特徴から、奈良～平安時代に所属すると思われる。

4. 赤焼土器

坏2点出土している。宮城県内での類例から、表杉ノ入式の土師器に伴つて出土している。

5. 中世陶器

捕鉢の体部破片1点出土している。全体の器形は、不明であり、所属時期は、明らかでない。

6. 石器

石器は、合計18点出土している。そのうち14点は出土地区、層位が不明である。表土及び第II層出土土器の所属時期から、縄文時代に属するものと思われる。

B. 第II層について

第II層は、調査区の南端・東端を除いて調査区のはぼ全域に分布し、縄文土器や石器などの出土遺物を多く包含する層である。この層から出土する土器の全てが小破片で、復原可能な土器が一個体もないこと、出土土器の所属時期が、早期(明神裏III式、大寺式、素山II式)、前期(上川名II式、大木I式～大木2式)、中期(大木8b、大木9式)、後期(初頭)、晚期(後半)の縄文時代各期のものが混在していることから、再堆積したものと考えられる。

C. 小堅穴遺構について

遺構内堆積土及び遺構床面から出土した遺物はないが、遺構のプランを確認する時に縄文土器2点出土している。したがって、遺構の築成された年代を明確にする上で必要な資料がなく、構内外に於いて柱穴等の遺構の性格を決定付けるものに乏しいため、その性格は、明らかでない。

V. まとめ

1. 混内山遺跡は、大松沢丘陵の枝状丘陵緩斜面に立地し、その緩斜面の北側を中心として、遺物を多く含む層が形成されている。
2. 第II層に、縄文時代早期中葉から晩期の出土遺物が含まれている。出土遺物の状況から、再堆積した可能性が強い。
3. 出土遺物の中に、縄文時代早期中葉に比定される土器がある。宮城県内では、発見例が少ない。今後の研究に資することができる。
4. 小堅穴遺構1基検出した。構築時期、及びその性格は、明らかにすることができない。
5. 第II層及び表土の出土遺物として、縄文時代早期～晩期の土器、石器、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器がある。以上のことから、遺跡の周辺に断続的ではあるが、生活の場として集落が形成されてきたものと思われる。

〈引用・参考文献〉 50音順

- 伊東信雄（1940）：「宮城県遠田郡不動堂村森山貝塚調査報告」東北帝國大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第二
- （1957）：「古代」宮城県史I。
- 氏家和典・大場恒一（1954）：「宮城県高倉村引田出土の土師器」歴史第8輯、東北史学会
- 大宮市教育委員会（1978）：「貝崎貝塚第3次発掘調査報告書」大宮市文化財調査報告第12集
- 加藤 孝（1952）：「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論集II
- 興野義一（1967）：「大木式土器理解のために(Ⅰ)」考古学ジャーナル13
- （1968）：「大木式土器理解のために(Ⅱ)」考古学ジャーナル16
- （1970）：「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」古代文化第22巻第11号
- 小井川和夫（1979）：「宮城県文化財発掘調査略報一桑折跡跡一」宮城県文化財調査報告書第57集
- 小牛田町教育委員会（1976）：「山前遺跡」
- 後藤勝修（1968）：「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚」仙台湾周辺の考古学的研究宮城教育大学歴史研究会編
- 紫桃正隆（1973）：「仙台城内古城・館第3巻」
- 白鳥良一（1974）：「仙台市三神遺跡の調査」東北の考古・歴史論集、平重道先生顕彰記念会
- （1978）：「宮城県七ヶ浜左道貝塚の縄文前期土器について」宮城史学6号
- 白石市史編纂委員会（1976）：「白石市史」別巻 白石市
- 芹沢長介・林謙作（1965）：「岩手県蛇王洞跡穴」石器時代No.7
- 角田文衛（1936）：「陸前船入島貝塚の研究」考古学論叢3
- 鳴瀬町教育委員会（1977）：「金山貝塚」鳴瀬町文化財調査報告第1集
- 林 謙作（1960）：「宮城県牡鹿島貝塚出土の前期縄文式土器群」考古学雑誌第46巻第3号
- （1962）：「東北地方早期縄文式文化的展望」考古学研究第9巻第2号
- （1964）：「縄文文化の発展と地域性—東北—」日本の考古学II 縄文時代
- 藤沼邦彦他（1978）：「名高田窓跡調査報告書」三本木町文化財調査報告書第4集 三本木町教育委員会
- 宮城県教育委員会（1969）：「埋蔵文化財第4次緊急調査概報—南境貝塚一」宮城県文化財調査報告書第20集
- （1973）：「山畠横穴古墳群発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第32集
- （1976）：「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財調査報告第46集
- （1976）：「宮城県遺跡図」宮城県文化財調査報告第47集
- 山内清男（1979）：「日本先史土器の縄文」先史考古学会

写 真 図 版

図版1



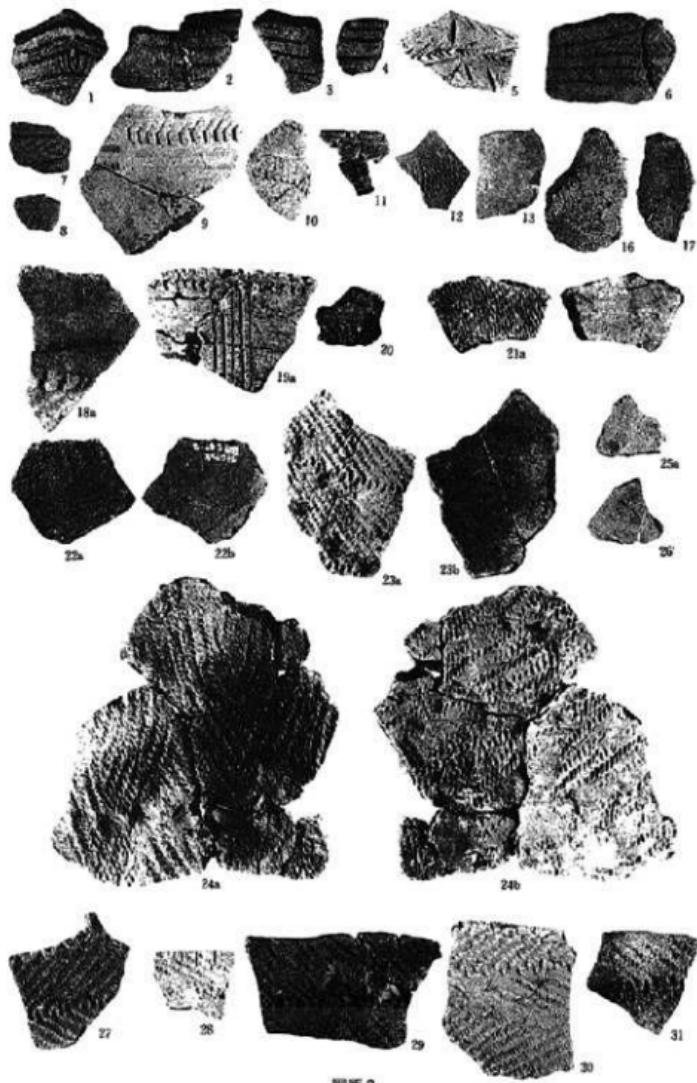
温内山道路全景（北側から）

46区北壁面

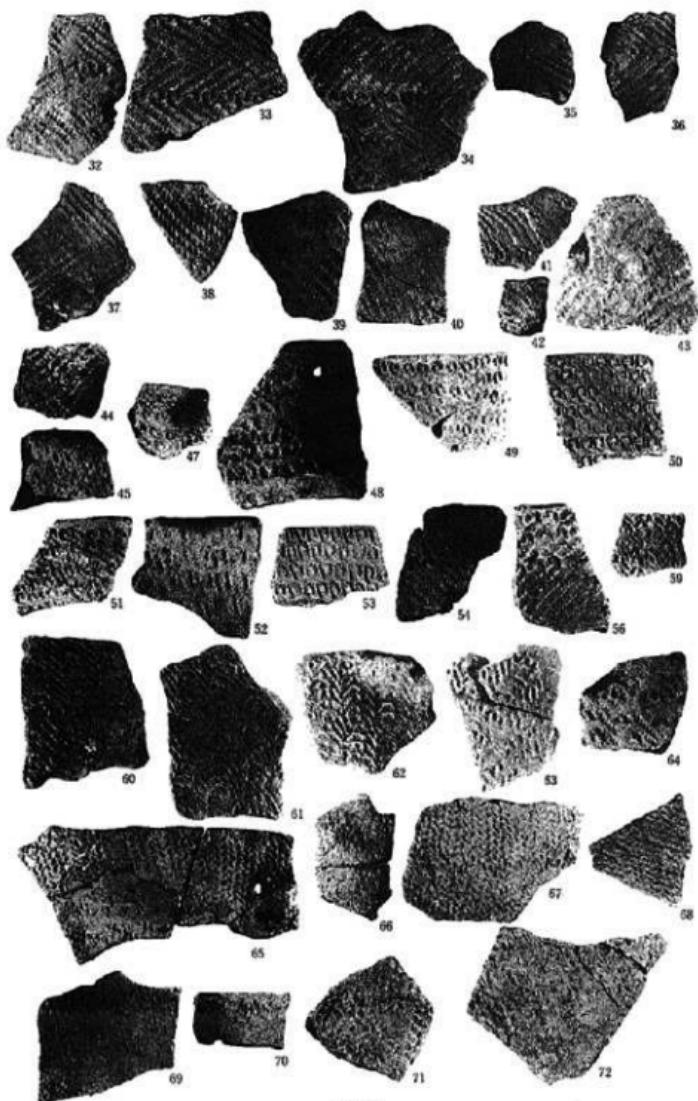


小壁穴遺構（東側から）





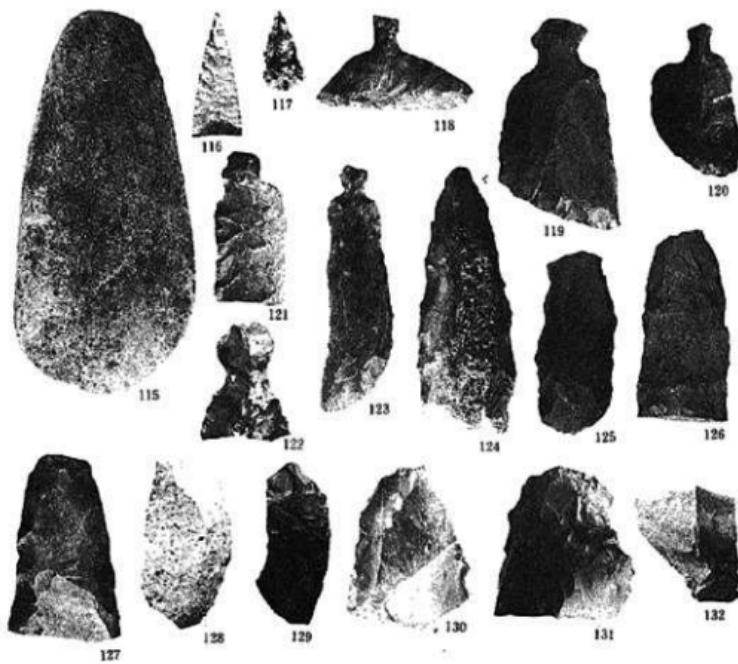
図版2



圖版 3



图版 4



図版5

(11) 舟 場 遺 跡

目 次

I 遺跡の位置と地形.....	417
II 調査の方法と経過.....	419
III 調査の成果.....	419
1. 基本層序.....	419
2. 土壌とその出土遺物	419
3. 表土および堆積層出土の遺物.....	420
IVま と め.....	423

調査要項

遺跡所在地：宮城県志田郡三本木町新沼字舟場

遺跡記号：AY（宮城県遺跡地名表登載番号：33023）

調査期間：昭和48年8月20日～9月1日

調査面積：約400m²

発掘面積： 144m²

調査員：文化財保護課

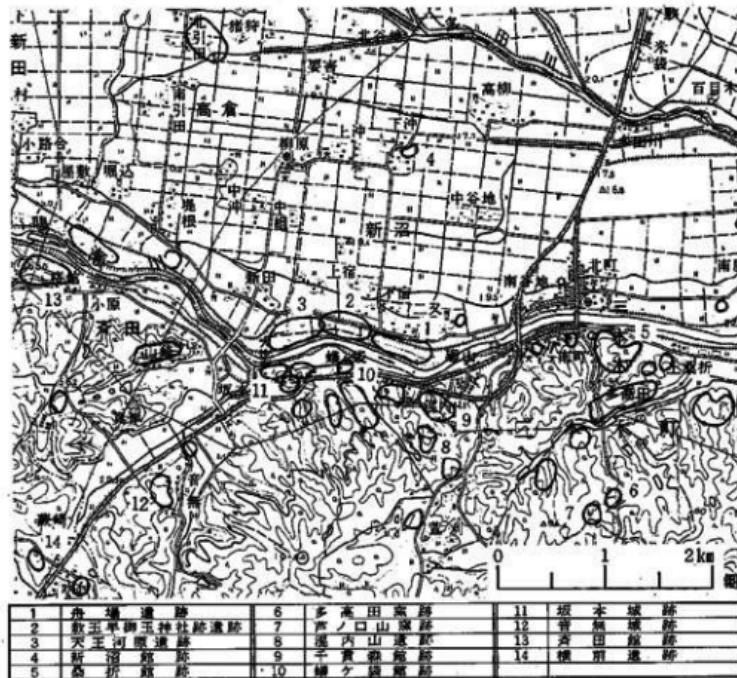
白鳥良一、工藤信一

調査補助員：柳賴和幸（東北大学学生）

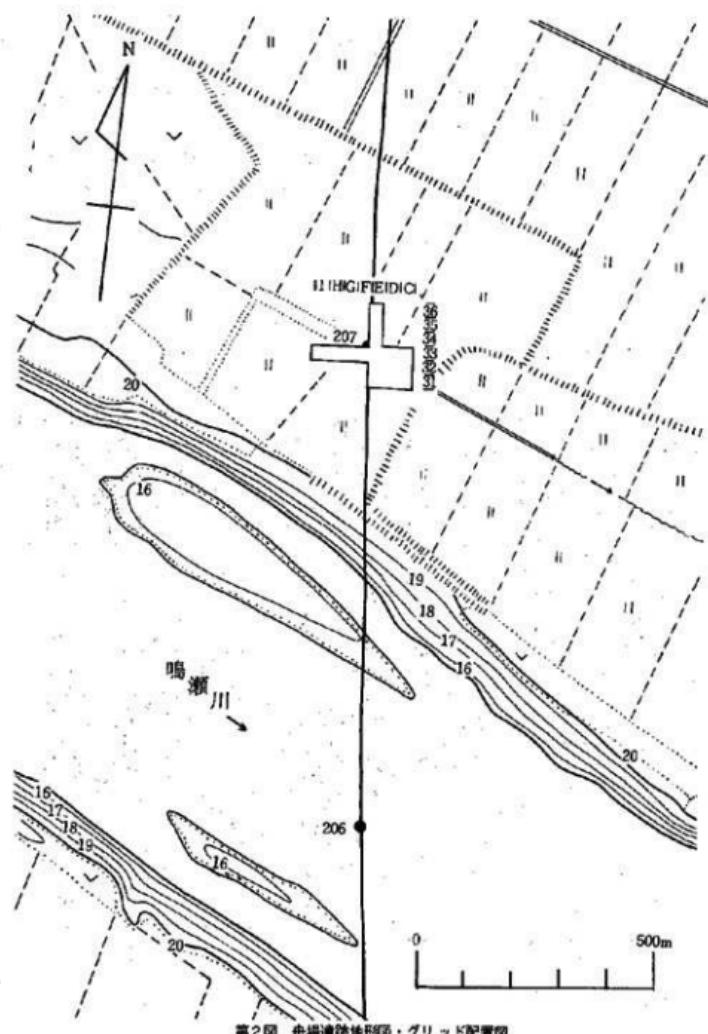
I 遺跡の位置と地形

舟場遺跡は宮城県志田郡三本木町新沼字舟場に所在しており、三本木町役場の西約1.7kmの地点に位置している。

本遺跡は、三本木町の中心部を東西に貫流している鳴瀬川左岸の自然堤防上の平坦面に立地しており、鳴瀬川に隣接している。標高は約20mであり、後背湿地との比高は約1mである。畑目は畠地および水田である。



(国土地理院発行 1/5万「吉川」を複製) 第1図 周辺の遺跡



第2図 舟場遺跡地形図・グリッド配置図

II 調査の方法と経過

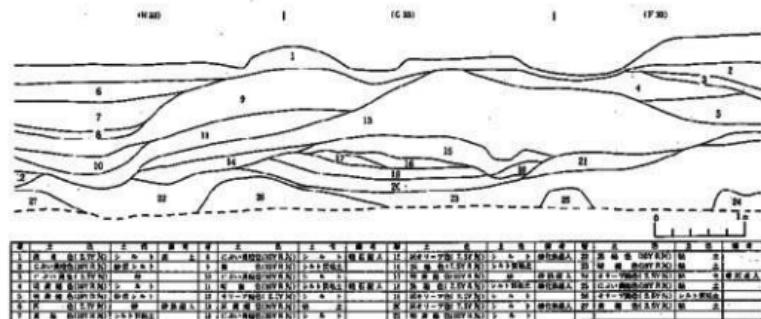
調査区は東北自動車道の中心杭を利用し、S TA 207+00とS TA 206+80とを結ぶ直線を基準線として一辺3mのグリッドを設定した。グリッドには東西にアルファベット、南北に数字を付して、両者を組み合わせてグリッド名を表示することにした。

調査は昭和48年8月20日に開始した。遺構としては土壤1基を確認し、遺物も各層から散発的に出土した。しかし、約1.5mほどの深さのところで湧水が激しくなり、これ以上の掘り下げが危険な状態となったため、9月1日に調査を終了した。発掘面積は16区144m²である。

III 調査の成果

1. 基本層序

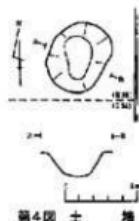
発掘調査によって掘り下げ面まで27層を確認することができた。発掘区全域に分布しているのは第1層(表土)だけで、それ以外の層は部分的に堆積している。全体的に、上部の層には砂質土層が、中間の層にはシルト層が、下部の層には粘土層が多いという傾向がみとめられる。これらの層は堆積状況から考えて、鳴瀬川の氾濫によってもたらされたものと思われる。



第3図 断面図

2. 土壤とその出土遺物

E 35区南東隅で土壤1基が発見された。平面形は楕円形で規模は上端で長軸1.0m、短軸0.8mである。壁高は約30cmでゆるやかに立ち上っている。壇底面は平坦であるが南側にやや傾斜している。遺物は土師器壺部の破片が1点出土している。器面調査は内外面とも摩擦のために不明である。土壤の時期は不明である。



第4図 土 壇

3. 表土および堆積層出土の遺物

各層から縄文土器・土師器・須恵器・赤焼土器・陶器・土製品・瓦・古銭が混在して出土している。

縄文土器

1点だけ体部破片が採集されている。外面には縄文が回転施文されているが、摩滅が著しく原体は不明である。胎土に纖維の混入はみとめられない。時期は不明である。

土師器

30点出土しているがすべて小破片であり図示できない。壺・甕・瓶の三種類の器形がみとめられる。

壺の体部外面はロクロ調整され、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。底部には回転糸切り痕の残っているものがある。甕の体部外面は刷毛目・手持ちヘラケズリ・ロクロ調整がなされ、内面には刷毛目、ヘラナデの器面調整がみとめられる。瓶は無底式の底部破片が1点出土しているが、摩滅のため器面調整は不明である。

以上のように、器面調整にロクロを使用したものとそうでないものとがある。前者は平安時代の表杉ノ入式とされている(氏家:1957)。おそらく後者も前者とそう変わらない時期のものであろう。

須恵器

22点出土しているがすべて小破片であり図示できない。壺と甕の二種類の器形がある。

壺は底部破片が1点出土しているが、内外面とも摩滅のために器面調整は不明である。甕には口縁部破片と体部破片がある。前者は1点だけの出土であり、外面はロクロ調整され、内面には自然釉がかかっている。後者には外面に手持ちヘラケズリ、平行タタキ目、ロクロ調整、内面にナデ、ロクロ調整がみとめられる。

時期は出土した土師器から考えて平安時代のものと思われる。

赤焼土器

壺の底部破片が1点出土している。製作にロクロを使用しており、回転糸切り技法による底部切離しのうちに内外面とも再調整がなされていない。県内各地で平安時代の土師器と共にしているので、本資料も同時期と考えられる。

陶器(第5図1~8)

26点出土しているが、すべて破片のために全体の形状を知ることができない。無釉の陶器と施釉された陶器がある。前者には甕・擂鉢・火鉢の三種類が、後者にはオロシ皿・鉢(?)の二種類がある。

甕は口縁部破片が1点出土している(1)。口縁部は外面下方に折れ曲ったのちに直立気味

に上方にのびて口縁帯を形成しているが、口縁帯の上半は欠損している。全体としてN字状口縁の形態になっている。頸部は「ハ」の字形になっており、そのまま肩部に移行している。器面調整は口縁部から頸部にかけて内外面とも横ナデが施されている。肩部の外面には自然軸がかかっているが、内面は雑なナデがなされている。甕の体部、底部破片は17点出土している。

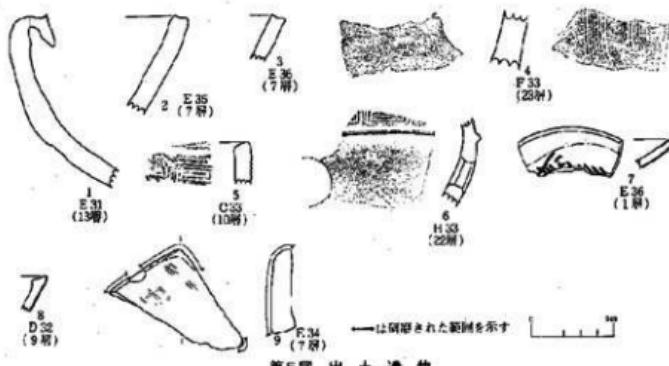
器面調整としては体部外面にナデ、体部内面に雑在ナデやナデツケがみとめられる。また、底部外面には特徴的な器面調整の痕跡はみとめられない。

擂鉢は口縁部破片と体部破片が2点ずつ出土している。口縁部破片(2・3)は両者とも内外面横ナデ調整され、口唇部に沈線状の浅いくぼみが1条めぐっている。体部破片には内面には筋目のあるもの(4)とないものとがある。前者には7条単位の筋目がえがかれている。

いずれも使用によって内面が摩滅している。

火鉢は口縁部破片(5)と体部破片(6)が1点ずつ出土している。5は外面に横長の長方形の雷文がめぐっている。外面から口唇部にかけてヘラミガキされているが、内面は摩滅のため不明である。6も5と同様に長方形の雷文がめぐっており、その下の1条の隆帯によって体部下半の無文部分と区画されている。無文部分には円形の透しがあり、残存部分から推計して径約3cmである。器面調整は外面がヘラミガキ、内面がナデである。両者とも同一の雷文が捺されており、色調や器面調整が類似していることから同一個体と考えられる。

施釉された陶器としてはオロシ皿が1点出土している(7)。内面の上半と外面には黄緑色の灰釉がかかっており、釉には貫入がみとめられる。オロシ目は直交しており、その断面形は深く鋭いV字形である。施釉された陶器のもう1点は小破片であるが、おそらく鉢であろうと思われる(8)。口縁内側に突帶がめぐっている。外面には黄緑色の灰釉がかかっており、釉にはやはり貫入がみとめられる。



第5図 出土遺物

次にこれらの陶器の年代について述べる。

甕は口縁部がN字状になっているものの、頸部に貼り付いてはいない。このような特徴の陶器は、常滑窯の編年では14世紀後半から15世紀中葉頃に位置づけられている(赤羽: 1977)。

筋目がない擂鉢は県内の各中世陶器窯から出土しているが、編年がまだ確立しておらず年代を限定することはできない。筋目のある擂鉢は白石市東北窯で採集されたもの(藤沼: 1976)に類似していることから中世のものと考えられるが、これ以上年代を限定することはできない。

雷文のめぐっている火鉢は仙台市岩切鴻ノ巣遺跡(白鳥・加藤: 1974)や白石市場ノ倉館跡(志間: 1969)に類例があり、中世のものとされている。オロシ皿については、藤沼邦彦氏によって桃山時代の美濃の可能性もあると考えられている(藤沼: 1977)。鉢と思われる施釉された陶器は小破片であるために年代不明である。

なお、中世陶器窯として付近には名高田窯跡と芦ノ口山窯跡が確認されているが、本遺跡との関連は不明である。

土製品(第5図9)

陶器の体部破片を研磨した土製品が1点出土している。素材となった陶器片の外面全面と周縁の一部に研磨が加えられており、研磨面には擦痕がみとめられる。素材となった陶器片の内面はナデ調整が施されている。

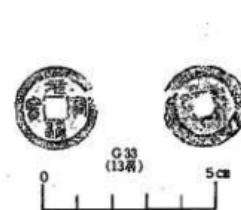
胎土や内面の器面調整などから考えて、中世陶器の甕体部破片を素材としている。なお、このような土製品は、神奈川県長勝寺遺跡(長勝寺遺跡発掘調査団: 1978)からも出土しているが性格は不明である。

瓦

平瓦の小破片が1点採集されている。凸面に平行タタキ目、凹面に布目がみとめられる。時期は不明である。

古銭(第6図)

「本祐通宝」が1枚出土している。周縁の一部を欠損している。北宗銭で、初騎年は1086年である。中世陶器に伴うものと思われる。



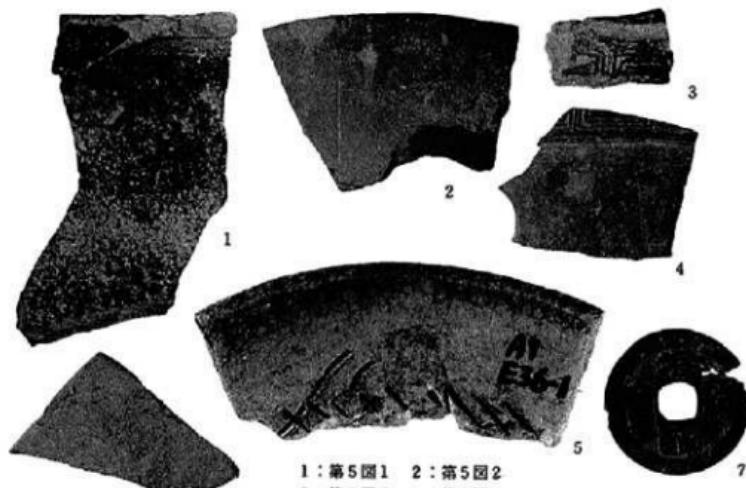
第6図 出土遺物

IVま と め

1. 本遺跡は鳴瀬川の自然堤防上に立地している。
2. 遺構としては土壙1基が確認されたが、時期は不明である。
3. 発見された遺物は各時期にわたる。主体となるものは平安時代と中世のものである。
4. 遺物は鳴瀬川の氾濫によってもたらされたものであり、付近に当時の集落跡があるものと思われる。

〈引用・参考文献〉

- 赤羽一郎 1977 「常滑」『世界陶磁全集』第3巻
- 氏家和典 1957 「東北土器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 志間泰治 1969 「東北縦貫自動車道関係湯ノ倉前御料式掘調査概報」『埋蔵文化財緊急調査概報』宮城県文化財調査報告書第18集
- 白鳥良一・加藤道男 1974 「岩切鴨ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第35集
- 長勝寺遺跡発掘調査団 1978 『長勝寺遺跡』
- 藤沼邦彦 1976 「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『東北歴史資料館研究紀要』第2巻
- 藤沼邦彦 1977 「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第3巻



1：第5図1 2：第5図2

3：第5図5 4：第5図6

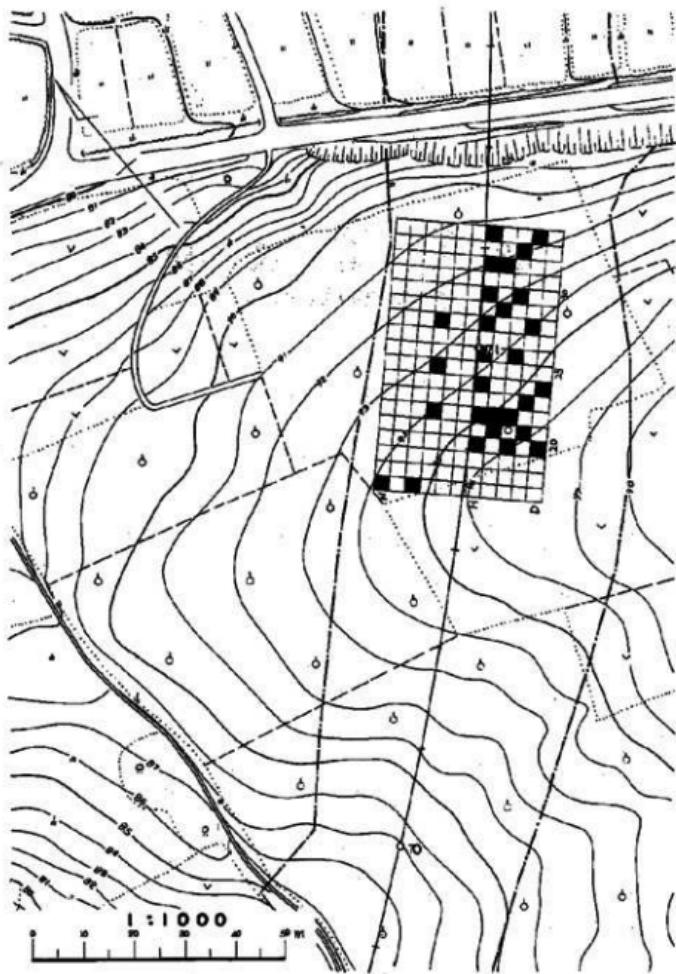
5：第5図7 6：第5図9

7：第6図

図版 上：道路遠景 下：出土遺物

(12) 大山遺跡

(県報告書第24集より転載)



第30図 大山遺跡地形図

大 山 遺 跡

1 遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町塩沢字大山

2 調査期日

昭和45年9月1日～10日

3 調査主体者

宮城県教育委員会 日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁社会教育課 技術主査 志間泰治

技師 藤沼邦彦

嘱託 白鳥良一

5 調査参加者

東北大学文学部考古学研究室 西脇俊郎・岩渕康治

6 調査の概要**(1) 遺跡の立地**

大山遺跡は、愛宕山丘陵から円田盆地へのびた一台地上にあり、両側を小さな谷にはまれ、盆地へとゆるやかに傾斜する(第1図)。

土器片の散布は量的に多いとはいえないが西斜面を中心に範囲は広い。

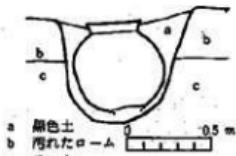
(2) 調査の経過

道路敷は台地の頂部附近を南北に横断するので、頂部から北斜面にかけて48m×24mの範囲でグリッドを設定した(第30図)。

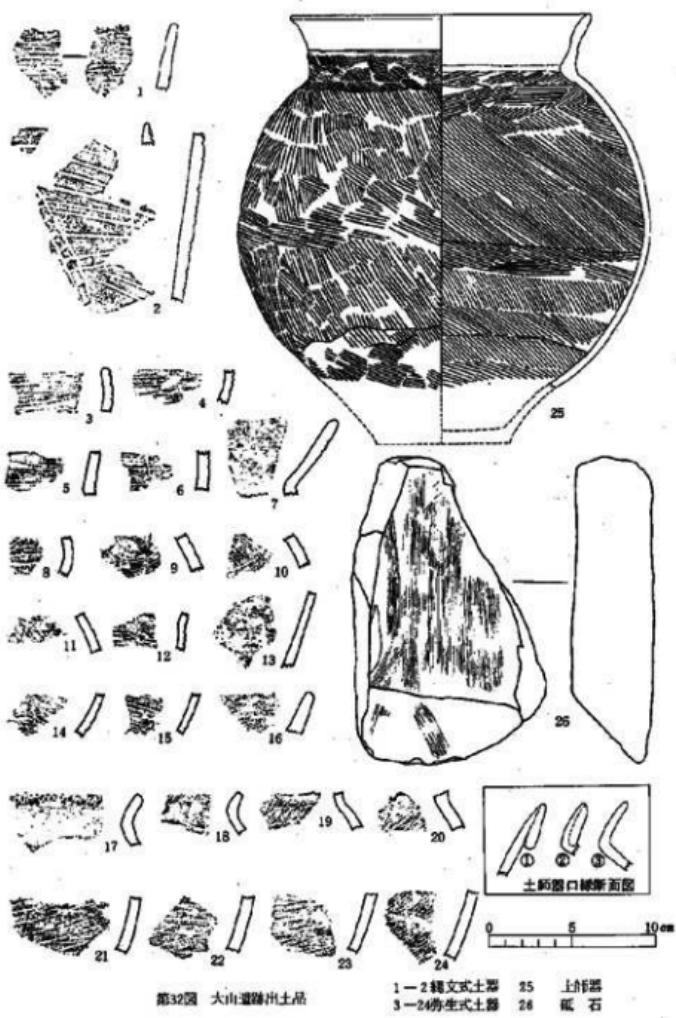
層位は表土、茶褐色土、ロームの順になるが、ロームまでの深さが約30～40cm前後で浅く、かつ果樹園であったため、果樹の根、消毒用パイプの埋設工事などで完全に攪乱されていた。

出土遺物も少く、土器はすべて細片で、良好な包含層はもとよりなかったと思われる。

遺構は土師器の埋甕があったのみである(第31図)。ロームに直径29～30cm、深さ27cmのピットが掘られ、その中に直立して埋められてあった。底部は欠損していた。



第31図 大山遺跡埋甕出土状況



第32圖 大山遺跡出土品

1—2 輪文式土器 25 上鉢器
3—24 勝生式土器 26 石

南斜面にも幾つかのグリッドをあけたが、遺物は殆んど出土しなかった。

(3) 出土遺物(第32図)

遺物は量的に少ないが、土器、石鏃、玦状耳飾、砥石などが発見された。

縄文式土器(2点)

A. 貝殻条痕文土器 口唇部に刻目をもつ。内外面とも貝殻条痕文をもつ。外面には三角形のつきさし文がある。胎土には纖維をふくむ。早期末の素山上層式に相当する(第32図1)。

B. 沈線文土器 口縁部をふくめ破片は数点あるが、同一個体に属する。口縁の破片が小さく果して平縁であるかわからぬ。平行沈線をいくつもかさね、三角形やC字形のつきさし文を配す。纖維の混入はない。田戸下層式に平行するものと思われる(第32図2)。

弥生式土器

すべて小破片で、文様、器形をみきわめにくいが、一応、壺形、鉢形、甕形、高杯形に分類できた。文様はすべて鋭い沈線によるのが特徴的である。

A. 壺形土器(第32図3~11) 口縁部は形態により2つに分けられる。(a) 口縁部が比較的短かく内彎し、平行沈線文と連弧文をもつ(3~5)。(b) 口縁部が盃状にひらき、細長い頸部となり、矩形文をもつ(6・7)。

体部上半の破片には、渦状文、重菱形文、などの文様がみられる(8~)。

体部下半は撚糸文あるいは縄文が施されるが、他の器形の体部破片と区別するのはむずかしい。

B. 鉢形土器(第32図12~15) 口頸部の形態が推察できるものは1片だけである。体部と頸部の境に軽い屈曲を有している(12)。体部は連弧文ないし平行沈線文をもつものが多い(13~15)。口頸部が外反し、口唇部に縄文が施される。体部と頸部との境に綾格文がめぐるものが多い(17~20)。体部は縄文或いは撚糸文が施されるのが普通である。また、肥厚する口縁部で大きくひらくものが一例あるがおそらく甕形土器のグループであろう(16)。

以上述べた他に、器形のわからない撚糸文或いは縄文だけの破片が多い。その比は約5:1で撚糸文の方がはるかに多い(21~24)。但し原体についてはもう少し観察と実験が必要である。

これら弥生式土器は文様、器形から弥生式時代後期の円田式に相当すると思われる。

土師器(第32図右下)

G22、F22区を中心に10数個体分の破片が出土したにすぎない、口縁部の特徴を知り

うるのは4例しかない。①外反する口縁部の外面に、貼りつけによる段をもつ、②肥厚する口縁部で、やや外反すると思われる。段の形成はないが、断面に貼りつけた痕跡が認められる。③外反する薄い口縁部で、貼りつけや段などはみとめられない。④外反する口頭部中央に浅い沈線がめぐるものとが分類される。

①は口縁部内外とも、ヘラミガキされるが、外面の段の下の頭部には細かな刷毛目がのこり、段の下までくいこんでいるのが観察される。おそらく、段の貼りつけ以前の刷毛目調整によるものであろう。壺形土器である。

②・③は口縁部の外面ともヨコナデして仕上げている。外面にヨコナデ以前の刷毛目の痕跡が若干のこる。

④は埋甕の土師器である。口縁部は内外ともヨコナデして仕上げているが、外面の沈線から頭部のつけ根にかけては細かな刷毛目で調整されている。体部はほぼ球形に近く内外とも刷毛目による調整である。底部を欠くがおそらく平底と思われる。外面に煤か附着している（第32図25）。

以上の壺、壺形土器以外にも朱塗の壺の体部、壺の底部と思われる破片がある。

これら土師器は、器形、成形技術などから、後述する大橋遺跡出土のものと同じであり、塩釜式期に相当する。

玦状耳飾（第33図）

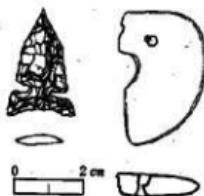
乳白色を呈した堅い石質である。肩の部分が張り、脚の部分がまるみをおびている。断面は扁平である。肩に両面から穿孔がある。半欠で、長さ3.9cm、厚さ0.6cmある。形態的には縄文前期のものに近い。滑石製である。

石鏸（第33図）

基部に近い両側から、えぐりの入ったアメリカ式石鏸である。大形でつくりもよく、肩のあたりが張って将棋の駒の先端を思わせるような恰好になっている。長さ3cm、幅2cm、厚さ0.4cmで弥生式土器に伴うものである。

砥石（第32図26）

緑泥片岩を利用したと思われる。表面が使用のためにまめつして、擦痕が認められる。土師器の時代のものであろうか。長さ18.5cm。



第33図 大山遺跡出土
石鏸・玦状耳飾

7　まとめ

すべて断片的な資料であるが、次の様にまとめられる。

- (1) 道路敷内は遺跡の周辺部に相当し、中心部はその外の西斜面にあるのではないかと思われる。
 - (1) 縄文時代早期、弥生式時代後期(円田式)、古式土師器の時代に営まれたものである。
 - (3) 積状耳飾は、縄文式時代前期あたりのものと思われる。アメリカ式石鏃は弥生式時代後期(円田式)に、砥石は古式土師器の塙釜式期に相当すると思われるが、砥石については確証がない。
- (4) 埋甕の性格は不明である。住居跡などの遺構に伴うものではない。

(藤沼邦彦)

(13) 伊原沢下遺跡

(県報告書第24集より転載)

伊原沢下遺跡

1 遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町円田字伊原沢下

2 調査期日

昭和45年9月10日～20日

3 調査主体者

宮城県教育委員会 日本道路公団

4 調査担当者

宮城県教育庁社会教育課 技術主査 志間泰治

技術 藤沼邦彦

嘱託 白鳥良一

5 調査参加者

東北大学考古学研究室 福田友之

6 調査の概要

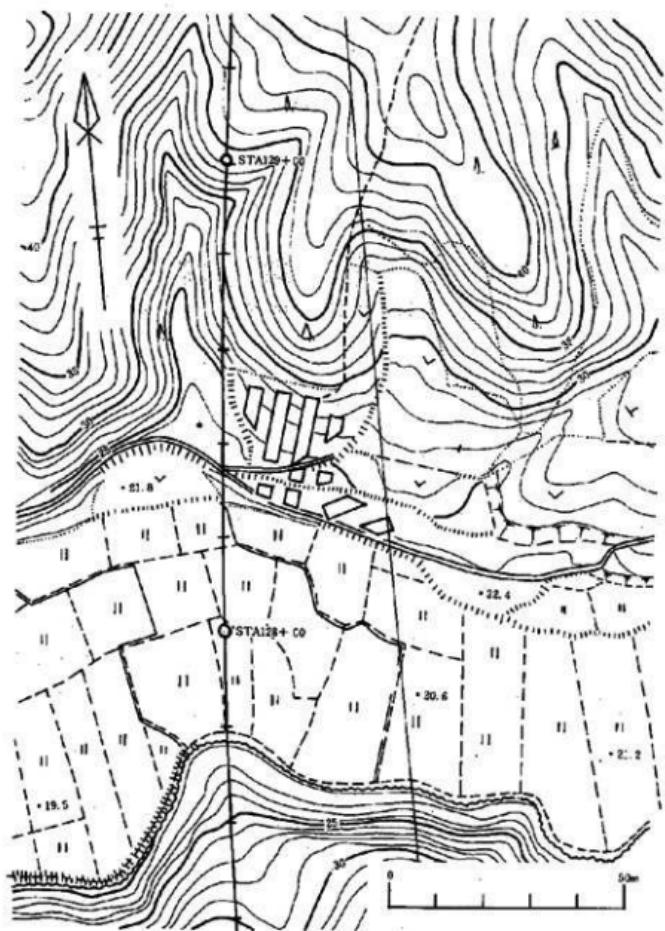
伊原沢下遺跡は、塩沢北遺跡のある台地の北斜面下方の平坦な畠地にある。

東西24m×南北30mの範囲で、グリットを設定し、117m²を発掘調査した。しかし、良好な包含層、遺構の発見はなかった。内黒クロ坏・高坏脚部などの若干の土師器の細片と北宋錢（元豊通宝）一枚が発見されたにすぎない。

（藤沼邦彦）

(14) 大 蜷 遺 跡

(県報告書第40集より転載)



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

大蛸遺跡は、大衡村役場の東方約2.5kmに位置している。この地域は大松沢丘陵の南麓にあたり、大小の谷や沢が複雑に入り込んだ丘陵地になっており、本遺跡もそれらのひとつである小丘陵の、小さな沢に面した南斜面に立地している。遺跡付近の標高は約26mである。

2. 調査の概要

調査は路線敷にかかる約500m²ほどを対象に調査区を設定して実施し、約189m²を発掘した。その結果、表土下がすぐ地山面となっており、遺構は全く検出されず^a、遺物も平安時代の土師器、須恵器の破片若干と、江戸時代の寛永通宝（鉄錢）が10枚ほど発見されただけであった。この調査結果から、遺跡の主体は路線敷の外側にあることが推測される。